

大東市埋蔵文化財調査報告第18集

ガソリンスタンド建設に伴う

# 寺川遺跡発掘調査報告書

——大東市寺川5丁目所在——

2003年1月

大東市教育委員会

# 序 文

本書は大東市教育委員会が平成8年に実施した、寺川遺跡の発掘調査報告書であります。

本遺跡はこれまでの調査で古墳時代～中近世の遺跡であることが解明されつつあり、特に、古墳時代後期～飛鳥・奈良時代にかけての遺物が多く出土している他、当時の建物跡と推定される遺構も見つかっています。注目されるのは「白麻呂」と人名の書かれた墨書須恵器が出土していることで、これは当地に、通常の集落ではない官衛的な施設が存在していた可能性を示唆する、有力な資料となっています。また、本遺跡内にある瓦堂遺跡では白鳳期(飛鳥～奈良時代)の布目瓦が採集されていることから、かつて、古代寺院が存在していたことも推定されています。本遺跡内には東高野街道、そして、少し南には中垣内越え道(古堤街道)が通っていたこともあり、これまでの調査結果は当地が古来より交通の要衝として、早くから開かれていたことを物語っています。

今回の調査でもこれまでの調査結果を裏付けるように、古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の遺物が出土した他、新たに古墳時代前期の遺構も発見されるという大きな成果を得ることができました。これは本遺跡のすぐ近くにある鍋田川遺跡と同時期のものであることから、何らかの関連があるものと推定され、両遺跡の関係についてまた新しい課題が与えられたといえるでしょう。

発掘調査によって得ることができた記録と資料は当時の人々の生活を復元することができるとともに、大東の歴史を解明するうえでも重要な役割を果たしています。本市教育委員会ではこのような埋蔵文化財をはじめとして、市内の文化財の保存に努力をしていく所存ですので、どうか今後とも本市の文化財行政に御理解・御協力を賜りますようお願いします。

最後になりましたが、調査報告書の刊行が遅れましたことをお詫び申し上げるとともに、調査の実施にあたりまして御協力を賜りました岡田耕治氏及び関係機関・関係各位に対し、厚く御礼を申し上げる次第であります。

平成15年1月

大東市教育委員会

教育長 中 口 馨

## 例　　言

1. 本書はガソリンスタンド(大和油化株式会社阪奈口ＳＳ)新築工事に伴う、寺川遺跡(調査名：T R K 96-1)の発掘調査報告書である。
2. 調査地の地番は大東市寺川5丁目1117番-1である。
3. 調査は事業者である大和油化株式会社代表取締役岡田耕治氏の依頼を受け、大東市教育委員会歴史民俗資料館が技術委員黒田淳を担当者として実施した。
4. 現地における調査は平成8年(1996)8月5日～同年9月19日まで実施した。現地調査終了後、他の発掘調査の作業と調整を計りつつ断続的に内業整理及び報告書執筆作業を行い、平成14年(2002)10月に脱稿し、本書の刊行をもってすべての作業が完了した。
5. 本調査に要した費用はすべて事業者の負担によるものである。厚く感謝の意を表する次第である。
6. 現地調査及び整理については八木尊生・西内敬美・野村香枝・井尻由美子・宮田八重子諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 事業者との協議及び現地調査の実施においては、大東市土地開発公社に御配慮を頂いた他、同時期に隣地で調査を実施されていた大阪府教育委員会文化財保護課技師地村邦夫氏からは、現地において多大なる協力と有益な御教示を頂いた。また、出土した獸骨類の鑑定と保存処理の一部は同技師宮崎泰史氏に依頼した。記して感謝の意を表する。
8. 本書の執筆・編集及び遺構・遺物の写真撮影は黒田が行った。
9. 本書で使用した座標は国土座標第Ⅳ系によるものであり、方位は座標北を示している。また、標高は東京湾標準潮位(T. P.)を基準としている。
10. 調査において作成した実測図・写真・カラースライド等は大東市立歴史民俗資料館に保管されている。今後、広く活用されることを希望する。

# 本文目次

## 序文

## 例言

第1章 調査に至る経過 .....	1
第2章 調査方法 .....	2
第3章 位置と環境 .....	4
第4章 調査成果 .....	9
第1節 基本層序 .....	9
第2節 A区の調査 .....	13
第3節 B区の調査 .....	35
第4節 C区の調査 .....	39
第5節 D区の調査 .....	41
第6節 E区の調査 .....	41
第5章まとめ .....	44
報告書抄録 .....	48

# 挿図目次

第1図 調査区配置図 .....	2
第2図 大東市位置図 .....	4
第3図 大東市埋蔵文化財分布図 .....	5・6
第4図 調査区土壁断面図 .....	11・12
第5図 A区第1遺構面平面図 .....	13
第6図 A区第1遺構面・Ⅱ層出土遺物 .....	14
第7図 A区第2遺構面平面図 .....	15
第8図 A区第2遺構面S R -01・Ⅲ層出土遺物 .....	17
第9図 A区第3遺構面平面図 .....	18
第10図 A区第3遺構面S D -01木査状木製品検出状況 .....	19
第11図 木査状木製品実測図 .....	20
第12図 A区第4遺構面平面図 .....	22
第13図 A区第4遺構面S R -02出土遺物(1) .....	23
第14図 A区第4遺構面S R -02出土遺物(2) .....	24
第15図 A区第4遺構面S R -02出土遺物(3) .....	26
第16図 A区第4遺構面S R -02出土遺物(4) .....	27
第17図 A区第4遺構面S R -02出土遺物(5) .....	28
第18図 S R -02出土ヘラ記号のある須恵器 .....	29
第19図 A区第4遺構面S R -02出土円筒埴輪 .....	30

第20図 「富寿神寶」	30
第21図 A区第4遺構面 S R -02出土石製品類	31
第22図 A区第4遺構面 S R -02出土木製品(1)	32
第23図 A区第4遺構面 S R -02出土木製品(2)	33
第24図 A区第4遺構面 S R -02出土木製品(3)	34
第25図 B区第5遺構面平面図	36
第26図 B区第5遺構面 S D -02出土遺物	37
第27図 B区V層出土遺物	38
第28図 C区Ⅲ・Ⅳ層出土遺物	39
第29図 C区第3遺構面平面図	40
第30図 S P -02平面図	40
第31図 C区出土製塙土器	41
第32図 E区第5遺構面平面図	42
第33図 E区第5遺構面 S D -02出土遺物	43

## 写 真 目 次

写真1 A区 S R -01検出状況(第2遺構面精査時)	16
写真2 S R -02出土馬骨	35
写真3 S D -02出土獸骨類	39
写真4 馬の骨格復元・寺川遺跡1989年度調査出土(大東市立歴史民俗資料館展示)	45

## 図 版 目 次

図版一	遺構(A区 第1遺構面)全景(南東より)/全景(東より)
図版二	遺構(A区 第1遺構面)鏑溝・杭列検出状況(北より)/S K -01検出状況(北より)
図版三	遺構(A区 第2遺構面)全景(東より)/全景(南より)
図版四	遺構(A区 第2遺構面) S R -01検出状況(東より)/ S R -01検出状況(西より)
図版五	遺構(A区 第3遺構面) S D -01・S K -03検出状況(東より)/ S D -01検出状況(西より)
図版六	遺構(A区 第3遺構面) S D -01木槌状木製品検出状況(西より)/ S D -01木槌状木製品 検出状況(北より)/ S D -01木槌状木製品検出状況(西より)
図版七	遺構(A区 第4遺構面) S R -02検出状況(南東より)/ S R -02検出状況(南西より)
図版八	遺構(A区 第4遺構面) S R -02須恵器甕出土状況(北西より)/ S R -02木製品出土状況 (南西より)
図版九	遺構(A区 第4遺構面) S R -02遺物出土状況(南西より)/ S R -02木製品出土状況(西 より)/ S R -02木製品出土状況(西より)
図版十	遺構(B区 第5遺構面) S D -02掘削前(南西より)/ S D -02検出状況(南東より)
図版十一	遺構(B区 第5遺構面) S D -02遺物出土状況(南西より)/ S D -02遺物出土状況(北東 より)

- 図版十二 遺構(C区 第3遺構面) S P -01・02、S K -01(南東より)/S P -02馬下顎骨出土状況(北西より)/完掘状況(南東より)
- 図版十三 遺構(E区 第5遺構面) S D -02検出状況(南東より)/ S P -03検出状況(北西より)
- 図版十四 遺構(E区 第5遺構面) S D -02遺物出土状況(東より)/ S D -02遺物出土状況(北西より)
- 図版十五 遺物(A区) 第1・2遺構面及びII・III層出土遺物
- 図版十六 遺物(A区) 第3遺構面 S D -01出土木柾状木製品
- 図版十七 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(土師器羽釜・甕)
- 図版十八 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(土師器杯・甕)
- 図版十九 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(縁軸・土師器杯・甕・弥生土器甕)
- 図版二十 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(須恵器杯)
- 図版二十一 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(須恵器杯・高杯・鉢)
- 図版二十二 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(須恵器高杯・摺鉢・甕・壺)
- 図版二十三 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(須恵器甕・器台・壺)
- 図版二十四 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(須恵器甕)
- 図版二十五 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(ヘラ記号をもつ須恵器)
- 図版二十六 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土遺物(円筒埴輪・「富寿神甕」・石製品・土製品)
- 図版二十七 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土木製品(杭・曲物底板等)
- 図版二十八 遺物(A区) 第4遺構面 S R -02出土木製品(板材・角材等)
- 図版二十九 遺物(B区) 第5遺構面 S D -02出土遺物(土師器甕・鉢)
- 図版三十 遺物(B区) 第5遺構面 S D -02及びV層出土遺物(土師器直口壺・複合口縁壺・甕・小型丸底壺・剥片)
- 図版三十一 遺物(B区) 第5遺構面 S D -02及びV層出土遺物(土師器直口壺・複合口縁壺・高杯・小型丸底壺・白玉・須恵器杯蓋)
- 図版三十二 遺物(C区) 第3遺構面 S P -01及びIII・IV層出土遺物(剥片・土師器甕・須恵器杯身・須恵器器台・製塙土器)
- 図版三十三 遺物(E区) 第5遺構面 S D -02及びIV層出土遺物(土師器高杯・鉢・小型丸底壺)
- 図版三十四 遺物(E区) 第5遺構面 S D -02出土遺物(土師器複合口縁壺・直口壺)

## 第1章 調査に至る経過

大阪と奈良を結ぶ幹線道路の一つである主要地方道大阪生駒線(通称：阪奈道路)は大阪市城東区を起点として東へ向かい、本市の市街地をほぼ東西に貫通した後、山越えの道となり、山間部の竪間を経て奈良県側へと続いている<sup>(註1)</sup>。この道路沿いの寺川5丁目付近一帯はちょうど山地から張り出した尾根の先端部にあたる低い丘陵地形をなしており、從来、寺川遺跡として周知されているとともに、周辺にも多くの遺跡が所在する地域となっている。そして、本遺跡は近年度々実施されている発掘調査によって、古墳時代～中世の遺跡<sup>(註2)</sup>であることが判明しつつある。

平成8(1996)年5月に阪奈道路北側に接する寺川5丁目1117番-1において、大和油化株式会社によるガソリンスタンド建設の計画が出された。大東市教育委員会(以下：市教委)では事業者に対し、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である寺川遺跡に含まれているため、文化財保護法第57条の2第1項による文化庁長官宛への届出を行うように指導した。その後、平成8年6月5日付で事業者からの届出があり、同年6月14日付大東教委第49号で大阪府教育委員会(以下：府教委)へ進呈、そして、府教委より同年6月28日付教委文1-2627号による通知(指導事項：発掘調査)があった。これに基づいて市教委で確認調査を実施したところ、古墳時代～中世の遺物包含層を確認することができ、複数の遺構面が存在する可能性の高いことも判明した。当初の計画通り工事が行われた場合、埋蔵文化財に影響を及ぼすことは明らかであり、先ず、事業者に対して設計変更による遺構・遺物の現状保存を求め、それが不可能である場合には記録保存を目的とする事前の発掘調査が必要であることを説明した。しかし、計画内容がガソリンスタンドという特殊な施設のため、工事のうちで最も深く掘削することになるガソリンタンク埋設部分の掘削深度(現況のG.Lから約-2.5m)は変更できないということであったので、発掘調査の協力を求めその理解を得ることができた。ただ、それ以外の部分については工事の掘削深度が埋蔵文化財に影響を及ぼさないよう設計変更が可能ということであったので、事業者への負担を軽減するうえでも、調査面積を削減する方向で協議を重ねた。その結果、敷地全体の掘削深度や事務所となる建物の基礎部分の掘削深度を浅くすることでこれらを調査の対象外とし、掘削深度が深くなるガソリンタンク埋設部分とオイルトラップ埋設部分、それに加えてキャノピー(屋根)支柱の基礎部分が3箇所の計5箇所を調査対象とする事で合意に達した。その後、調査の期間・費用・開始時期等に関する協議を経て、調査の委託を受けた市教委と事業者である大和油化株式会社代表取締役岡田耕治氏との間で発掘調査に関する覚書を締結し、文化財保護法98条の2第1項による発掘調査着手の通知(平成8年6月27日付大東教委第49号)に基づいて発掘調査を実施した。現地における調査は、平成8年8月5日に開始し、同年9月19日に終了した。

### 註

(1) 大阪から奈良方面へ向かう登り専用車線のことと、奈良方面からの降り専用車線は本市中垣内1丁目に降りてきている。

(2) 既報の調査は以下のとおりである。

『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987大東市教育委員会

『寺川・瀬田川遺跡発掘調査報告書(学校法人大阪産業大学内所在)』1991大東市教育委員会

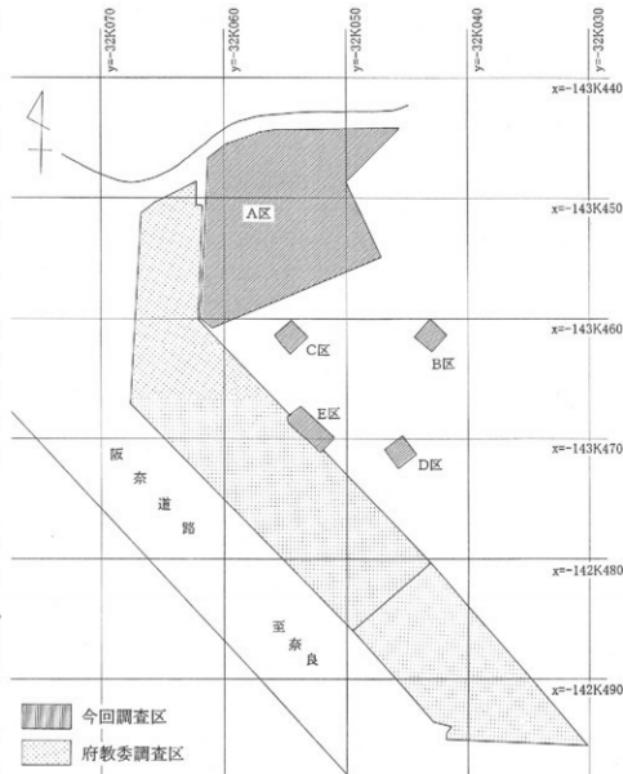
『寺川遺跡発掘調査報告書(倉庫付事務所建設に伴う)』1997大東市教育委員会

『寺川遺跡発掘調査報告書(店舗付共同住宅建設に伴う)』2000大東市教育委員会

## 第2章 調査方法(第1図)

前章でも記述したように、調査対象となつたのはガソリンタンク埋設部分とオイルトラップ埋設部分、そして、キャノピー支柱の基礎部分が3箇所の計5箇所であり、それぞれにA～Eのアルファベット大文字を冠して調査区名とした。調査面積と工事の掘削深度は以下に示すとおりで、調査総面積は223m<sup>2</sup>となった。

第1図でも示すようく、A区(ガソリンタンク設置部分)の調査面積が最も広く、また、掘削深度も深いため、先ず、A区から調査を開始し、それと併行してB～D区(基礎部分)、E区(オイルトラップ部分)の調査を実施した。E区に関しては、隣接地において府教委による阪奈道路拡幅工事に伴う発掘調査が先行して実施されていたので、そちらの進行状況と調整を計りながら実施した。



第1図 調査区配置図

調査区	面積	工事掘削深度
A区	205m <sup>2</sup>	GL-2.5m
B区	4m <sup>2</sup>	GL-1.5m
C区	4m <sup>2</sup>	GL-1.5m
D区	4m <sup>2</sup>	GL-1.5m
E区	6m <sup>2</sup>	GL-1.8m

調査区の地区割りに関しては、調査面積の広いA区のみを任意の4地区に分けている。遺物の取り上げはおよそ基本層序ごとで行い、A区ではさらに地区ごとに分けて行った。当初、遺構の名称と番号はその種類に応じて、調査の過程で検出された順に通し番号を付けていたが、報告書作成段階で遺構の性格が明確になったものや、異なる調査区でも同一遺構面・同一遺構と確認できたものはこれを整理して付け直している。

現場での遺構及び遺物出土状況の実測は従来の水糸を方眼状に張って行う方法と平板測量を併用して行い、遺構等の位置関係は国上座標第IV系を基準にして光波による測量を行った。標高は東京湾標準潮位(T.P.)を使用している。また、実測図に使用した土色は小山正忠・竹原秀夫編著『新版標準土色帳』を使用した。なお、国土座標及び標高の基準は府教委の現場の基準点を利用して頂いた。

## 第3章 位置と環境(第2・3図)

寺川遺跡の所在する大東市は河内平野の北東部に位置している。市域の東半分は生駒山系による山地・丘陵地で占められており、市街地のすぐ背後には標高314.3mの飯盛山が存在する。およそ西半分は標高約1~5m足らずの平地がほとんどで、河内平野全体からしても低い場所となっている。そして、山地と平地の間には飯盛山塊より流れ出す中小河川によって形成された小規模な谷口扇状地が見られ、そこでは標高9~20mの微高地が形成されている。平地は沖積層から成り、地盤の悪い低湿地性の粘土やシルトが堆積しているが、これは縄文時代前期～中期頃に起きた海進現象により生駒山麓まで海水が入り込み、かつて河内平野全体が広大な潟（河内潟）であったことに起因している<sup>(註1)</sup>。その後、河内潟は淀川や柏原方面から北流していた旧大和川の分流である諸河川<sup>(註2)</sup>の堆積作用と水域の後退等で、上町台地を境として外海と隔てられるようになり、弥生時代前期頃には次第に淡水化が進み潟（河内潟）となっていたが、さらに古墳時代頃になると完全に外海と隔てられるようになり、淡水湖（河内湖）となっていた。この湖は古代末～中世にかけてその範囲が縮小し、「勿入湖（ないりそのふち）」<sup>(註3)</sup>や「廣見池（ひろみいけ）」<sup>(註4)</sup>等の名称で呼ばれるようになり、近世初頭頃にはさらに規模を縮小させ、「深野池」と「新開池」と呼ばれる二つの池となっていた。新開池は隣市の東大阪市に、深野池は本市域に存在し、前述のように南からは大和川の分流である諸河川、北からは寝屋川が流れ込み、流域や池の周辺は水害が絶えない地域であった。しかし、近世中頃の宝永元年（1704）に行われた大和川付け替え工事により、両池とも干拓され新田開発が行われその姿を消し、本市の現在の地形が出来上がった。

本遺跡は現在のところ東西約500m、南北約750mの規模で広がっており、標高約20~60mを測る丘陵地とその下に形成された扇状地上に立地している。そして、本遺跡の周辺やその範囲と重複するように各時代の遺跡や古墳が存在している。

縄文時代では中垣内遺跡で土坑と推定される遺構内より中期末の土器<sup>(註5)</sup>の出土が報告されているが、これが今のところ本市において遺構に伴うものと推定される唯一の例で、この時代の集落に関しては不明な点が多い。同遺跡内ではこの他晩期までの各時期の土器も出土しているが、弥生時代の遺物を含む自然河川からであり、また、鍋田川遺跡でも早期末～前期初頭、中期後半、晩期等の各時期の土器が出土しているが<sup>(註6)</sup>、やはり包含層中からの出土であるため、これらの状況から東方の丘陵地に集落の存在が推定されているに過ぎない。

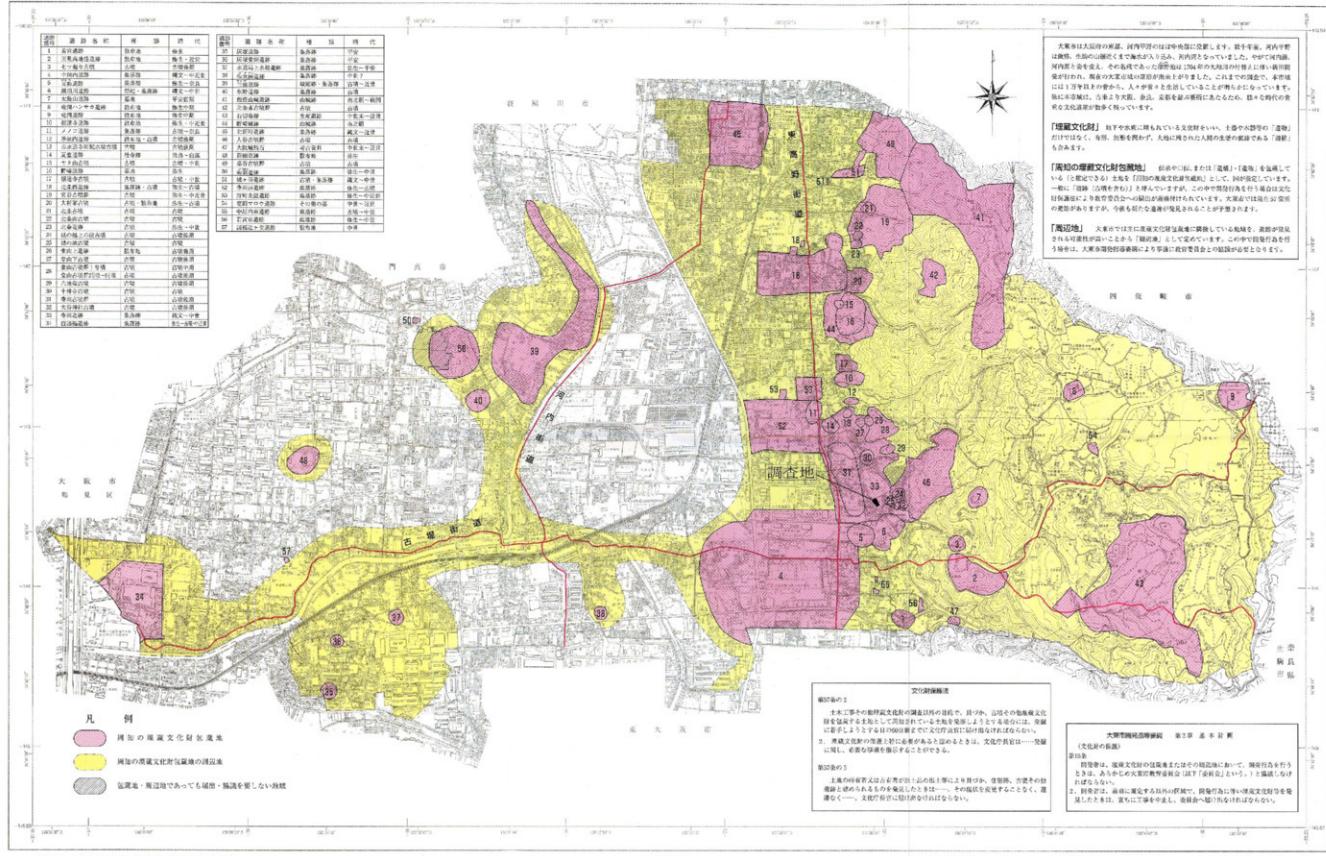
弥生時代では本市を代表する遺跡として、前期～中期にかけて集落が営まれていた中垣内遺跡<sup>(註7)</sup>が挙げられる。最近の調査では野崎条里遺跡、北条西遺跡でも前期の土器が出土しており、これらは当時の河内潟縁辺部に立地した集落であったと考えられている。また、本遺跡内の北に位置する堂山古墳群が所在する丘陵地には、弥生時代後期頃と推定されている溝<sup>(註8)</sup>が検出されている。



第2図 大東市位置図

1:10,000

# 大東市埋蔵文化財分布図



第3図 大東市埋蔵文化財分布図

古墳時代では中垣内遺跡で前期の集落跡<sup>(註9)</sup>が検出されており、鍋田川遺跡では前期の土器とともに滑石製有孔円板・卜骨・刻骨等の祭祀色の強い遺物が出土している<sup>(註10)</sup>。中期～後期の集落跡の検出例こそ少ないが、各所で土師器・須恵器が採集されているので、背後の丘陵地に築かれた古墳の造営基盤となる集落が存在していたことが推定される。ところで、鍋田川遺跡、堂山下遺跡では格子タキ文のある韓式系土器が採集<sup>(註11)</sup>されたり、メノコ遺跡では鳥足文を施した土器や初期須恵器が出土<sup>(註12)</sup>したりしており、当時この地域が朝鮮半島と深いつながりがあったことが窺える。現在本遺跡の近隣では多くの古墳が周知の遺跡として登録されているが、既に消滅してしまったものや未調査のものが大半を占めている。その中でも堂山古墳群は発掘調査によってその内容が解明されている数少ない古墳の一つである。同古墳群は同じ丘陵上に8基の古墳が造営され、第1号墳とされているものが古墳時代中期の終り頃で、他は後期に属している。第1号墳は周間に埴輪列を伴う径約25mを測る円墳で、初期須恵器とともに三角板皮継短甲・衝角付冑・鉄刀・鉄鎌等の多量の鉄製武器・武具類が出土していることから、当時朝鮮半島との関係が深かった首長級の墓と推定されている<sup>(註13)</sup>。この他の古墳を挙げると、峯垣内古墳<sup>(註14)</sup>・六地蔵古墳<sup>(註15)</sup>・十林寺古墳<sup>(註16)</sup>・城の越古墳<sup>(註17)</sup>・城の越上の段古墳<sup>(註18)</sup>・大谷神社古墳<sup>(註19)</sup>・寺川古墳群<sup>(註20)</sup>・大谷古墳群等があり、採集されている遺物等から後期古墳と推定されている。

飛鳥・奈良時代では本遺跡で古墳時代終末～奈良時代前半と推定される掘立柱建物<sup>(註21)</sup>が検出され、瓦堂遺跡ではほぼ同時期(白鳳期)の布目瓦<sup>(註22)</sup>も出土している。今のところこの時期の集落の内容・性格は明らかではないが、本遺跡では墨書き須恵器<sup>(註23)</sup>が出土しており、通常の集落とは性格の異なる官衙的な施設の存在も推定されている。

平安時代～鎌倉時代でも本遺跡内でこの時期の遺構が確認されており<sup>(註24)</sup>、この頃から遺跡内を南北に通る東高野街道周辺に、今日の集落の原形ともいえるべき集落が形成され始めたものと推定される。

戦国時代には本遺跡の背後にある飯盛山に飯盛山城が存在していたことが知られており、一時的はあるが畿内一円の支配に成功した戦国武将三好長慶の居城になっていた。同じ頃、眼下の深野池に浮かぶ島にはその支城である三箇城があり、長慶の臣下であった城主の三箇頼照は洗礼を受け、三箇サンチョと呼ばれる熱心なキリスト教信者として知られていた。その頼照のことやこの城の様子は当時日本に滞在し、キリスト教布教に努めていたイエズス会宣教師ルイス＝フロイスによって克明に記録されているのであるが、残念ながら、現状では発掘調査による具体的な知見は得られていない。

戦国時代末期には豊臣秀吉による大坂城築城の際に、飯盛山中より石垣用の石材が切り出されていたことが知られており、また、近世初頭の徳川氏による大坂城再築の際にも石材の供給地となっており、これに携わった諸藩を示す刻印や矢穴の残る石<sup>(註25)</sup>が、飯盛山中やその麓に残っている。

## 註

- (1) 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986青木書店
- (2) 近世の大和川付け替えまで流れていた玉串川、久宝寺川、平野川等の前身である諸河川。
- (3) 清少納言『枕草子』の中に記述がある。
- (4) 『藤原康高譜状案』河内水走家文書・鎌倉遺文十ノ七四四五
- (5) 『中垣内遺跡発掘調査報告書(大東市立市民体育館建替え工事に伴う)』1997大東市教育委員会  
※浅い円形状の土坑と推定されるSK-09から北白川C式に属する土器が出土している。
- (6) 『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書(学校法人大阪産業大学内所在)』1991大東市教育委員会

- (7) 中垣内5丁目にある関西電力東大阪変電所内における調査。  
『中垣内遺跡発掘調査報告書(関西電力株式会社東大阪変電所内所在)』1990大東市教育委員会
- (8) 『堂山古墳群発掘調査概要』1973大阪府教育委員会  
『堂山古墳群』1994大阪府教育委員会  
※中期以降、立地場所は丘陵地に移る傾向が見られる。
- (9) 1986年に実施された大阪産業大学校舎新築工事に伴う発掘調査。
- (10) 昭和33年の鍋田川砂防堰堤建設工事の際に発見された。  
『大東市史』1973大東市教育委員会
- (11) (10) と同じ。  
※また、(6)の調査でも出土している他、市内の山手の各遺跡から出土している。
- (12) 『メノコ遺跡発掘調査報告書』1998大東市教育委員会
- (13) (8) と同じ。
- (14) 河内一浩「大東市の埴輪」『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987大東市教育委員会  
※現在、大東市埋蔵文化財分布地図では「峯垣内遺跡」の名称で登録されているが、円筒埴輪が採集されていることから、ここでは古墳として名前を挙げた。
- (15) (14) と同じ。  
※円筒埴輪が出土。
- (16) (14) と同じ。  
※前方後円墳と伝えられるが定かではない。また、石棺が出土したとも伝えられる。
- (17) (14) と同じ。  
※円筒埴輪が出土したと伝えられる。
- (18) (14) と同じ。  
※円墳で石棺が3基出土したと伝えられる。
- (19) 勾玉が出土した。
- (20) (14) と同じ。  
※石棺、円筒埴輪、土師器、須恵器が出土した。
- (21) (6) と同じ。
- (22) (10) と同じ。
- (23) 『寺川遺跡発掘調査報告書(倉庫付事務所建設に伴う)』1997大東市教育委員会
- (24) 『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987大東市教育委員会  
※(23)の調査でも検出されている。
- (25) 本市の竜岡山中には「□・◎・▢・△・○」の多種類の刻印石が存在しており、国見高地性遺跡では「○」の刻印石が発見されている。また中垣内1丁目には大阪城残石と呼ばれる巨石が存在しており、「◎・▢・○・△」といった刻印が見られる。

## 第4章 調査成果

### 第1節 基本層序(第4図)

基本層序は各調査区共通で説明する。

#### 基本層序Ⅰ層

調査地全体の表上となっていた黄灰～灰黄褐色系の土である。地表面の標高はT.P.+21.8～22.3mを測り、調査地は東から西に傾斜する斜面上に造られた棚田になっていた。調査の結果、近世頃からつい最近まで水田として利用されていたことが判明しており、本層はその耕作土である。調査前の準備工の段階で整地を目的として調査地全体の地表面に若干の削平を加えたため、調査開始時では層厚が薄く土層断面図に現れなかった箇所もあるが、全体に約0.4m程の層厚で堆積していたものと考えられる。

#### 基本層序Ⅱ層

Ⅰ層の直下に堆積していた黄橙色・浅黄色・灰黄色・灰褐色系の土で、各調査区で確認することができた。層厚は0.3～0.45mを測り、A区ではぶい橙色土と灰黄色土、B区では浅黄色土と灰黄色土の2層に分層することができた。本層は前述した近・現代まで営まれていた水田の底土である。上面で耕作痕(鋤溝)や杭列が検出されており、本層の上面を第1遺構面として検出した。各調査区の本層上面(第1遺構面検出面)の標高はA区でT.P.+21.5～21.8m、B区でT.P.+22m、C区でT.P.+21.6m、D区でT.P.+22.2m、E区でT.P.+21.6～21.7mを測り、基本層序Ⅰ層で記述したように、調査地が東から西に傾斜する地形であることを示していた。

#### 基本層序Ⅲ層

Ⅱ層の直下に堆積していた褐色系の土で、層厚は0.2～0.4mを測る。A区ではさらに褐灰色土と灰黄褐色砂混じり粘質土の2層に分層することができた。D区では本層に相当する土層は確認されておらず、欠落している模様である。D区以外の調査区では本層の上面で鋤溝が検出されており、また、A区では調査区の北側で鎌倉時代を下限とする自然河川(SR-01)が検出された。これらの面を第2遺構面として検出した。本層は含まれる遺物から奈良・平安～鎌倉時代に形成された層と推定される。各調査区の本層上面(第2遺構面検出面)の標高はA区でT.P.+21.15～21.65m、B区でT.P.+21.9m、C区でT.P.+21.3m、E区でT.P.+21.2～21.6mを測り、第1遺構面と同様に東から西に傾斜する地形であることを示していた。

#### 基本層序Ⅳ層

近接し合うA区とC区でのみ確認された層である。A区では本層の上面で溝(SD-01)や土坑(SK-03)が、C区ではビット(SP-01・02)や土坑(SK-02)が検出され、第3遺構面とした。検出面の標高はA区でT.P.+20.5～21.2m、C区でT.P.+20.7mを測った。また、本層は粘質土・砂質土・砂層等から構成されており、最終的には下位の第4遺構面で検出した、古墳時代～奈良時代の遺物を出土している自然河川(SR-02)の埋土であることが判明した。B・D・E区ではこの層が欠落していたので、SR-02の範囲はA・C区より南東には広がらないとすることができ、北東から南西方向に流れているものと推定される。

### **基本層序V層**

B区のみで確認することができた古墳時代前期～中期頃の遺物包含層である。灰黄色砂混じり粘質土から成り、所々の窪んだ箇所には灰オリーブ色細砂が堆積していた。検出面の標高はT.P.+22.35～22.4m、層厚は0.15～0.2mを測った。

### **基本層序VI層**

遺物を全く含まない層であり、今回の調査における地山の土として本層を設定したが、各調査区でそれぞれ異なった様相を示していた。A区ではS.R.-01・02の川底となっていた緑灰色砂混じり粘土で、検出面の標高はT.P.+19.6～20.6mを測った。B区でも同様の土が古墳時代前期の溝(S.D.-02)を検出した第5遺構面のベース層となっていたが、検出面の標高はT.P.+22.2mを測った。また、D区では浅黄色砂混じり土、E区では灰オリーブ色砂混じり土が第5遺構面のベース層として検出され、さらにその下層には浅黄色～灰黄色系の砂質土が水平に堆積していることが確認された。D区での検出面の標高はT.P.+21.9～22m、E区でT.P.+20.9～21.6mを測り、特にE区では南東から北西に傾斜する斜面として検出されたことから、調査地には北東から南西方向に開く谷が形成されていたことが推定される。なお、VI層は隣接して実施された府教委の調査において、最下層で確認された砂礫層<sup>[注1]</sup>に対応しているものと考えられる。

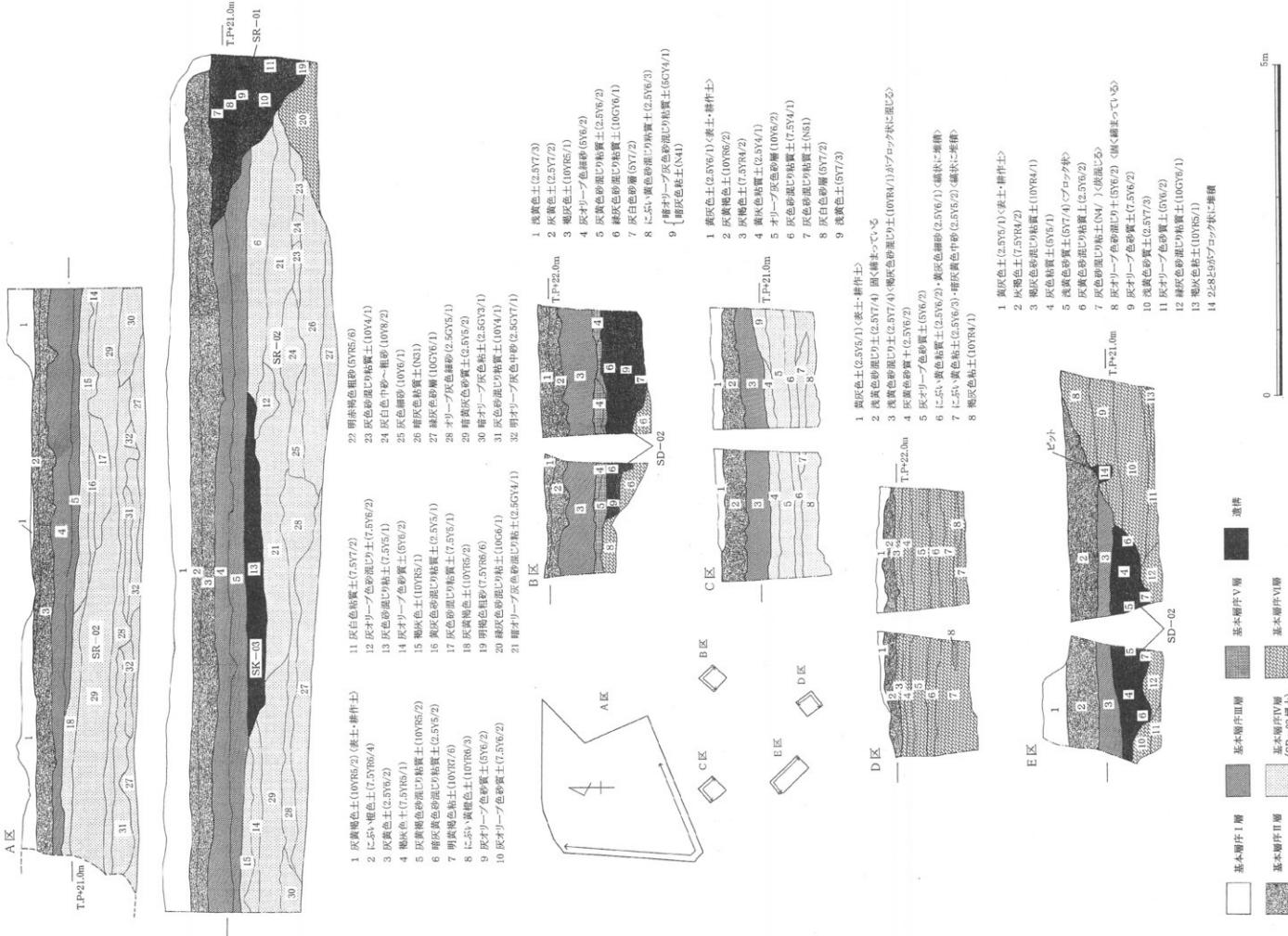


図4 調査区土壤断面図

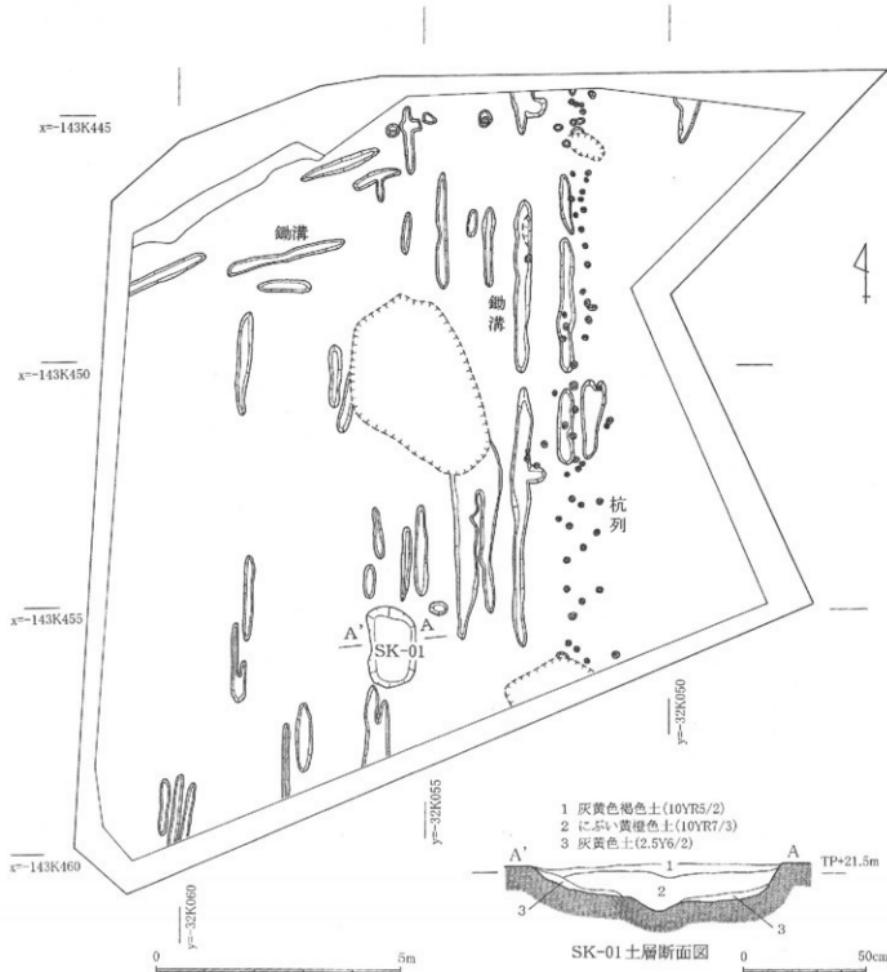
## 第2節 A区の調査

調査前の地表面はT.P.+21.8~22.3mを測った。

### 第1遺構面

II層上面で検出しており、検出面のレベルはT.P.+21.5~21.8mを測った。

遺構はほぼ南北方向に走る複数の溝と土坑・ピットを検出した。



第5図 A区第1遺構面平面図

## 遺構(第5図 図版一・二)

### 溝群

調査区全体で検出しており、幅0.2~0.5m、深さ0.05~0.1mを測った。途中で切れながらも南北方向に平行して走り、規模や検出状況からみて耕作痕(鰐溝)であると考えられる。

### S K -01

長円形を呈する土坑で、検出規模は0.97×1.7m、深さは0.19mを測った。埋土は3層から成り、灰褐色土、にぶい黄橙色土、灰黄色土が堆積していた。遺物は近世の染付や瓦の小片が出土しているが、遺構の性格については不明である。

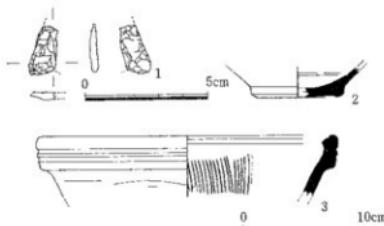
### ピット群

調査区の西側で検出した径約0.1~0.2mを測る小径のピット群で、幅約1mの範囲で2~3列となって、南北方向に走っており、内部には杭が残存しているものもあった。検出状況から水田を画する境界に打ち込まれた杭列の痕跡と推定される。

## 遺物(第6図 図版十五)

本遺構面での出土遺物の量は少なくそのほとんどが小片であるため、図示し得たのは遺構面精査時にベース層となっているII層より出土している以下の3点の遺物である。

1はサスカイト製の石鏃である。先端部と側縁部の一部を欠いているが、四基無茎式に分類される。2は白磁碗底部である。高台部分のケズリダシはわずかであり、内面には沈線状の段がある。外面は高台、底部とも無釉で、これらの特徴から森田分類<sup>[32]</sup>の碗IV-1a類に相当する。3は陶器壺鉢である。外面は回転ヘラケズリ、内面の摺り目は口縁部付近を軽くナデ消している。口縁内側には凸帯があり、形態の特徴から堺産のものと推定され、白神分類<sup>[33]</sup>のI型式に属するものと考えられる。



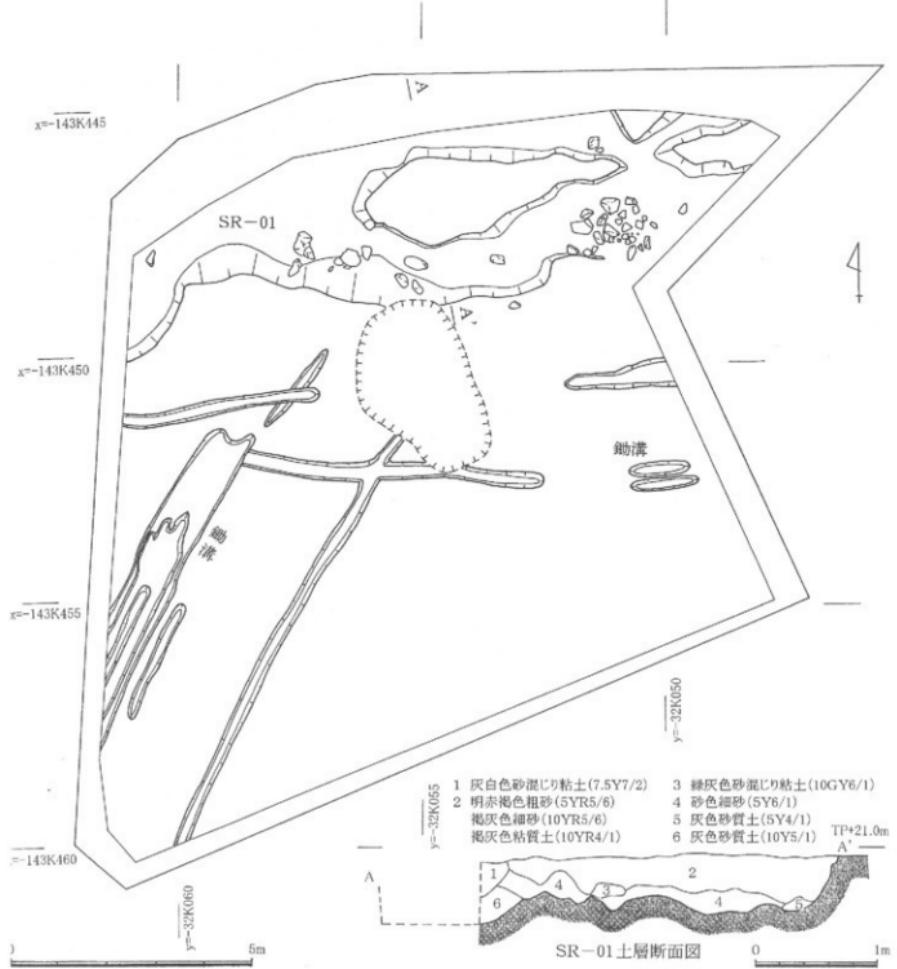
第6図 A区第1遺構面・II層出土遺物

調査前の状況は斜面を利用して造られた棚田であったことから、本遺構面で検出された杭列は棚田に設けられた段に関連していたものであると考えられる。検出面はほぼ平坦で段は認められなかったが、杭列は東西方向の斜面に対して直交するように走り、これが棚田の境界にあたる段の位置に相当しているものと推定される。おそらく、これらの杭は段を強化する目的で裏込めの部分に打ち込まれたものと考えられる。

本遺構面の時期を推定する資料は乏しいのであるが、I・II層には近世の染付や瓦が含まれていたことから、近世～近代にかけて営まれていた耕作面であったと考えられる。

## 第2遺構面

III層上面で検出しており、検出面のレベルはT.P.+21.15~21.65mを測った。



第7図 A区第2遺構面平面図

第1遺構面と同様に複数の溝を検出した他、調査区の北側では東西方向に流れる自然河川を検出した。

遺構(第7図 図版三・四)

溝群

第1遺構面と同様に検出状況からみて鉤溝と考えられるが、走行は北東から南西方向を示していた。

## S R-01

調査区北側で検出した。本遺構面精査時では調査区の北東隅で遺構の輪郭を検出していたが、その段階では長さ3.7m、幅0.85mと検出範囲も狭かったため、落ち込み状の遺構(写真1)として理解し、上層の明黄褐色粘土とにぶい黄橙色土を除去するだけに止めていた(深さ約1m)。ところが、調査が進行し第3遺構面精査時にになってその範囲が東側に広がることが確認され、また埋土が砂質土や粗砂で構成されていたことから、東西方向に流れていた自然河川であることが判明した。しかし、この時点では所属遺構面は明確ではなかったが、調査の最終段階で調査区の西縁断面精査を行った際、河川の肩が本遺構面のベース層であるⅢ層上面から切り込まれていることを確認することができ(第4図)、本遺構面の遺構として扱うこととした。最終的な検出規模は長さ13.5m、幅3.2~3.5m、深さ1~1.2mを測った。埋土は上層に明黄褐色粘土とにぶい黄橙色土が約0.4mの厚さで堆積していたが、下層は0.1~0.2m大の石が含まれているオリーブ灰色砂質土、灰白色粘質土、明褐色粗砂となっており、川底となるVI層上面付近には時おり約0.5m前後の石が散在して堆積していた。これらの埋土の状況より、下層は河川による自然堆積層であるが、上層は土がブロック状に堆積しており、河川がある程度浅くなった段階で、最終的には人為的に埋め戻された様相を呈しているようであった。

### 遺物(第8図 図版十五)

ベース層となっているⅢ層より奈良時代~鎌倉時代の遺物が出土しており、S R-01からは古墳時代の須恵器や飛鳥・奈良~平安時代の土師器等が出土しているが、それに加えて瓦器や白磁等の鎌倉時代の遺物も出土している。また、少量ではあるが馬の骨も出土している。

### Ⅲ層出土遺物

5は土師器杯である。ほぼ平らな底部で、口縁端部は内側に肥厚し、底部にはヘラケズリが施されている。ほぼ平城Ⅲ期<sup>[註4]</sup>頃に相当する。18は白磁碗である。底部を欠いているが、外面に櫛目文、内面は楕円による花文が施されている。森田分類の碗V-2類或いはV-4類に相当するものであろう。

### S R-01出土遺物

4は土師器皿である。口縁部外面に軽いヨコナデが施され、端部をやや内側に肥厚させている。底部外面には指頭圧痕が残る。平安I~II期<sup>[註5]</sup>頃に相当する。6は土師器杯である。楕形を呈し、口縁端部は外反して内傾する面を持つ。内面に放射状略文、底部外面にはヘラケズリが施されている。飛鳥I期頃に相当する。7は土師器皿である。底部内面が上方に突出する、いわゆる「へそ皿」と呼ばれているもので、平安Ⅶ期古~中頃に相当する。8は土師器杯である。口縁端部は外反し、体部外面に指頭圧痕が残る。飛鳥V期頃に相当する。9は土師器甕である。球状の体部に外反気味の短い頸部が付き、口縁端部は外反している。体部外面に指頭圧痕が顕著に残っており、内面は板状工具によるナデが施されている。平安Ⅱ期中~新頃に相当する。10は瓦器碗である。内面には細かい團線ミガキが、見込みには連結輪状の暗文が施されているが、外面のヘラミガキはほとんどが省略されている。口縁端部内側に沈線による段を

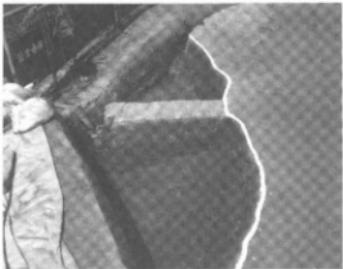
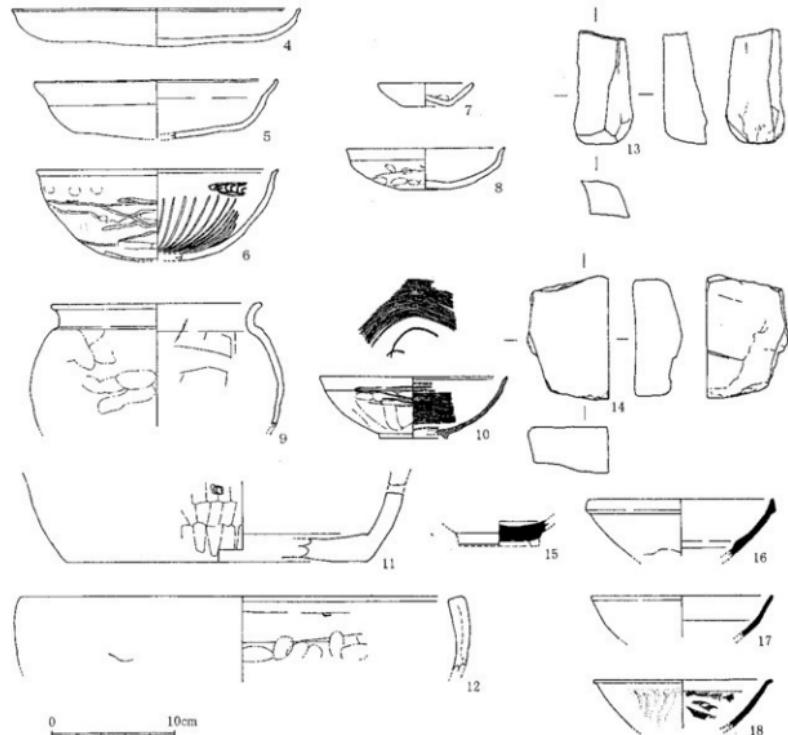


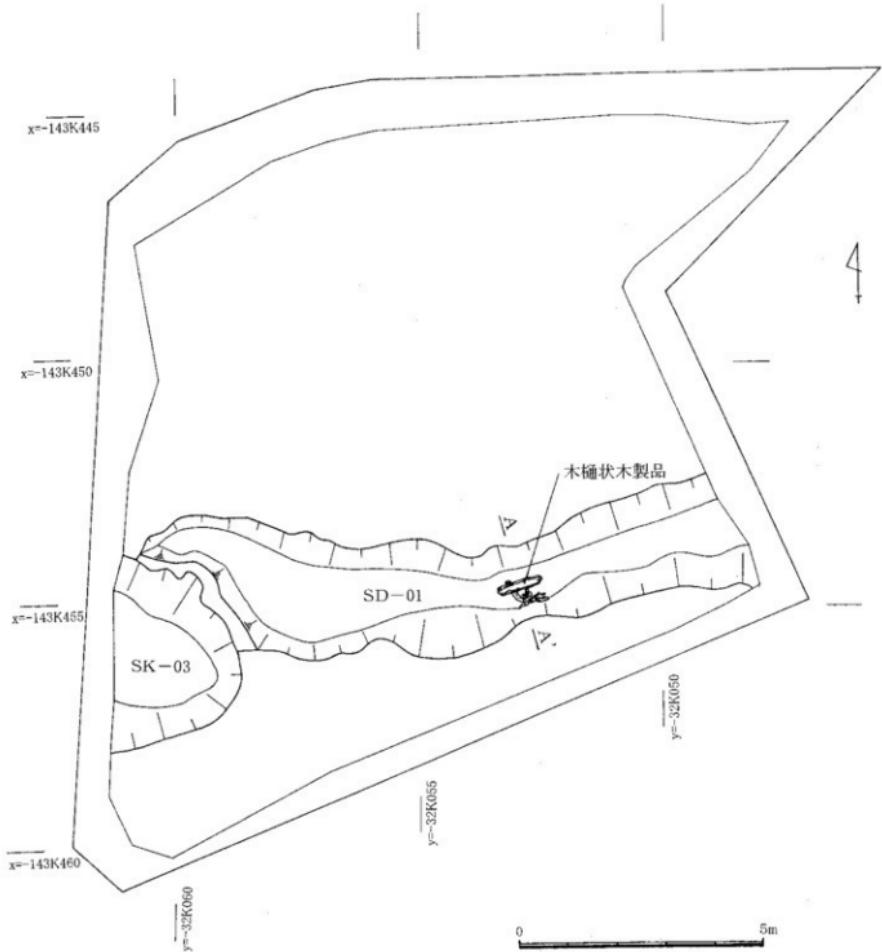
写真1 A区 S R-01検出状況

(第2遺構面精査時)



第8図 A区第2遺構面S R - 01・Ⅲ層出土遺物

持つ特徴から大和型と考えられ、川越分類<sup>(35)</sup>のⅢ-Aに相当している。11は滑石製石鍋である。体部外面に加工痕が顕著にみられ、蔓取手穴がある。片断ではあるが鉗がなく浅いタイプと推定され、木戸分類<sup>(36)</sup>のⅡ類に相当するものであろう。12は瓦質の火舎である。外面に花文のスタンプがあり、俗にいう奈良火鉢の類であろう。坪之内分類<sup>(37)</sup>の浅鉢Ⅰ或いはⅢに相当する。13・14は砥石である。13は使用面が3面ある。片方の端部は破損面であるが、もう一方の端面は鼓打による成形をしている。砂岩製。14は板状で、使用面が2面ある。石材は不明。15は白磁碗底部である。内面の見込みに近い部分に沈線状の段がある。高台部分を欠いているが底部とともに無釉である。森田分類のⅣ-1a類に相当する。16・17も白磁碗であるがこちらの方は底部を欠いている。16はやや小さめの玉縁口縁を呈し、体部内面の見込み付近に段を持つ。釉調は青味を帯び体部下半は無釉である。森田分類Ⅳ-1b類に相当している。17は薄手で、口縁端部を丸く終わらせている。体部内面の中位に沈線状の段があり、森田分類V-1類に相当しようか。



第9図 A区第3遺構面平面図

SR-01出土遺物の内容を見ると、自然河川という遺構の性格もあり、古墳時代後期～鎌倉時代と非常に時期幅の広い遺物が出土しているためその時期を確定しがたいが、河川の埋没時期は最も新しい時期の遺物より、鎌倉時代墳(瓦器椀の型式から13世紀墳)と考えて差し支えないであろう。さらに、ベース層となっているⅢ層にも同時期の遺物が多く含まれているので、本遺構面の時期は概ね鎌倉時代に相

当するものと考えている。また、鉛溝の方向は第1遺構面とは異なる北東から南西方向であったことから、この時代は異なった土地の区割りがなされていたものと推定される。

### 第3遺構面

IV層上面で検出しており、検出面のレベルはT.P.+20.5~21.2mを測った。

遺構は東西方向に走る溝と落ち込み状の遺構を検出した。また、本遺構面において調査区の北側で自然河川S R-01を検出したが、第2遺構面の項でも述べたように、調査区の西壁土層断面の観察等より、S R-01はIII層上面から切り込んでいることが確認されたため、所属を第2遺構面とした。

遺構(第9・10図 図版五・六)

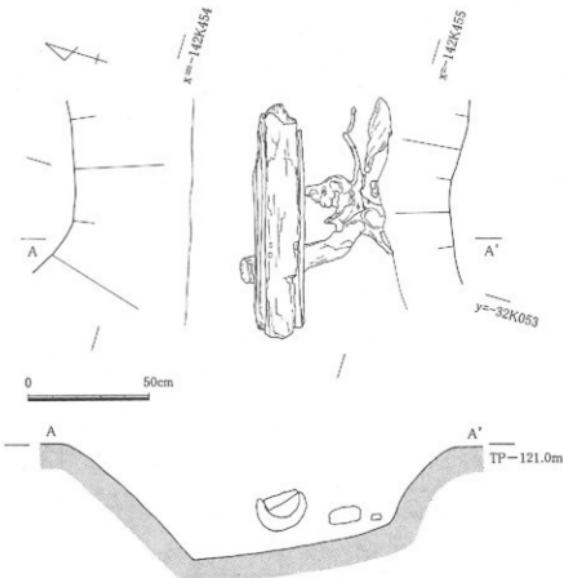
### S D-01

調査区を東西方向に横切るようにして検出した溝である。溝の西端は、落ち込み状の遺構であるSK-03によって切られていた。西側に隣接して設定された府教委の調査区では、このような溝は検出されていなかったので、当調査区で完結しているものと推定される。一方、調査区の東壁土層断面にはこの溝の輪郭が現れていたので、調査区の東側には続いていることが確認された。検出幅1.3~2.9m、深さ0.7mを測り、埋土は褐色土、黃灰色砂混じり粘質土、灰色砂混じり粘質土が堆積していた。東端から西へ約5mの溝底部において、木桶状木製品を検出した。

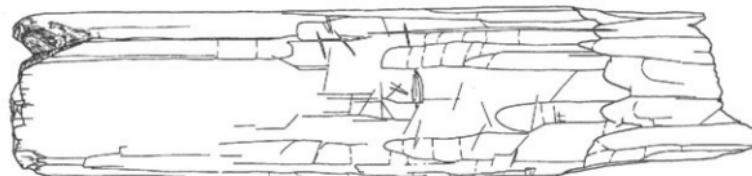
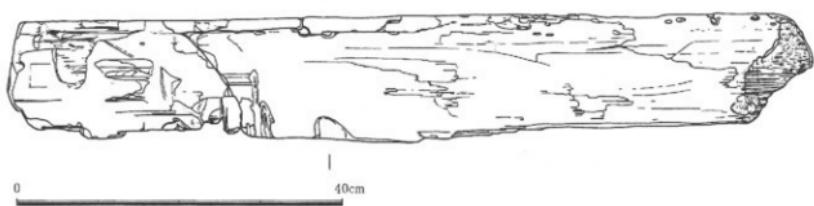
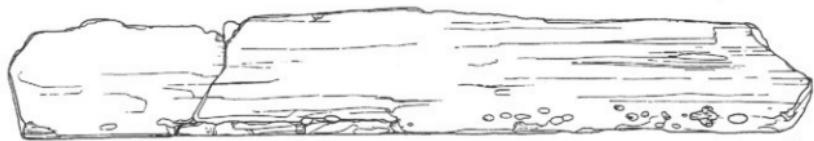
木桶状木製品は蓋と身から成り、溝が最も深くなるほぼ中央部で、流れに沿うように小口を東西方向に向けた状態で置かれていた。身の断面形はU字状を呈しており、身の長さとほぼ同等の板状木製品で蓋がしてあった。検出状況よりこの溝に設けられた暗渠であった可能性が高い。遺物は古墳時代後期~奈良・平安時代頃と推定される須恵器・土師器等の小片が出土している。

### S K-03

東側はSD-01と重複していた。検出規模2.6×4.3m、深さ0.6mを測り、埋土は黃灰色砂混じり粘質土、灰色砂混じり粘質土が堆積していた。全体を検出してないので形状は不明で、SD-01と同様、当調査区で完結しているものと推定される。遺物は古墳時代後期~奈良・平安時代頃と推定される須恵器・土師器等の小片が出土している。



第10図 A区第3遺構面 SD-01木桶状木製品検出状況



第11図 木桶状木製品実測図

## 遺物

前述のように、土器に関しては何れも小片であるため図示し得なかった。

### S D -01出土木製品(第11図 図版十六)

19は蓋として使用されていたもので、長さ99.3cm、幅15.7cm、厚さが最大4.9cmを測る。樹皮こそ遺存していなかったが、断面形がクサビ状を呈しており、ちょうど丸太を断ち割ったものを簡単な加工でそのまま使用しているようである。遺存状況は悪く表面はかなり磨耗しており、現状では目立った加工痕は観察されなかった。樹種はケヤキ材を使用していた。20は断面「U」字状を呈している。長さ92.2cm、幅15.7cm、厚さが最大14.2cmを測る。一木の丸太をくり抜いて作られており、内部の加工痕は目立たないが、外部は加工痕が顕著に認められる。小口の一方(検出時、東側の小口)は、外側から削られ細くなるように加工しており、同形状の物を連続して使用するときに、差し込み部として機能していたのかもしれない。樹種はコウヤマキ材を使用していた。

本遺構面のベース層となっているIV層は、次の第4遺構面で検出した古墳時代～奈良時代の遺物が出土している自然河川S R -02の埋土となっていたことから、本遺構面が形成されたのはS R -02の埋没後ということになる。本遺構面の時期であるが、SD -01・SK -03からは古墳時代の須恵器・土師器も出土しているが、これらは遺構内を掘り下げていく段階でIV層の遺物が混入している可能性を考慮に入れる必要があり、本遺構面の時期を正確に示しているとは断定できない。後述するように、S R -02が埋没するのは古墳時代末～奈良時代初頭頃、また上部の第2遺構面の時期が鎌倉時代と考えられるので、上下の遺構面が示している時期との関係から少々おおざっぱではあるが、本遺構面の時期は奈良時代以降～鎌倉時代以前と推定している。

## 第4遺構面

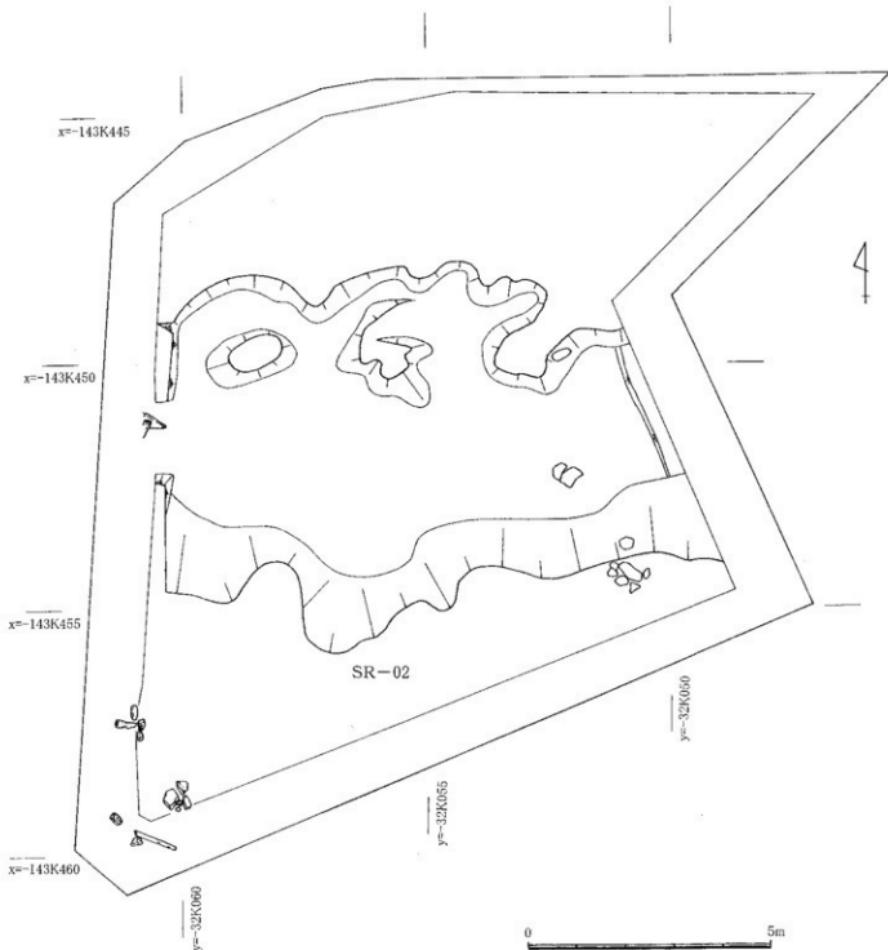
調査区全体でIV層を埋土とする自然河川を検出した。この河川の底がすなわち地山であるVI層である。

川底の検出面はT. P. +19.6～20.6mを測った。

### 遺構(第12図 図版七・八・九)

#### S R -02

検出された河川の幅が調査区の規模を超えていたため調査区全体が河川の範囲となっており、このため河川の両肩を検出することができなかった。西壁土層断面(第4図)では川底の土であるVI層が北に向かって上がっており、この付近に北側の肩があったものと推定されるが、S R -01によって切られていたため肩は確認できなかった。また、南側の肩であるが、当調査区の南側に設定したC区ではこの河川の埋土であるIV層の堆積が確認されたことから、河川の範囲内に位置していると考えられ、川幅はさらに南側へ広がるものと予想していたが、これに反して、B・D・E区ではIV層を確認することができないので、B・E区を結ぶラインとC区の間に存在しているものと推定される。(第1図調査区配置図を参照)これらの状況から、S R -02は幅約20mの規模で、調査地を北東から南西方向に流れていたものと推定される。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期のものから奈良時代末頃までのものが出土しているが、量的には古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の遺物が多かった。また、埋土中には獸骨類が多く含まれており、牛、イノシシ等の骨が一部認められたが、大半が馬の骨であった。



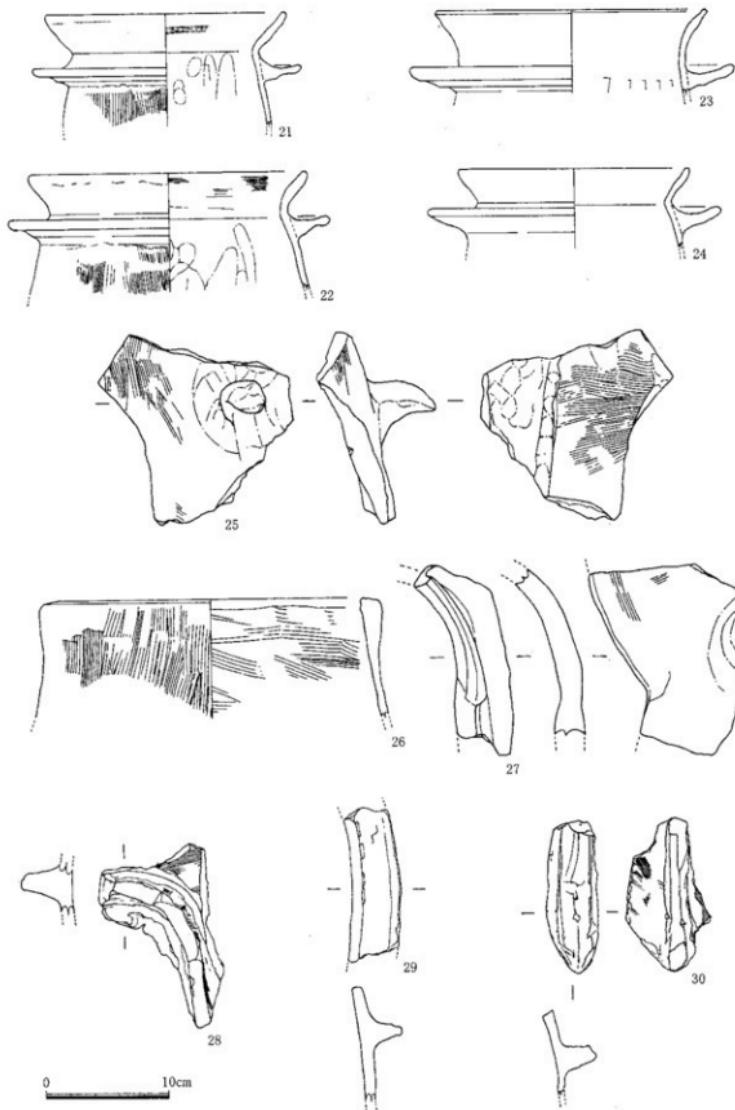
第12図 A区第4遺構面平面図

遺物

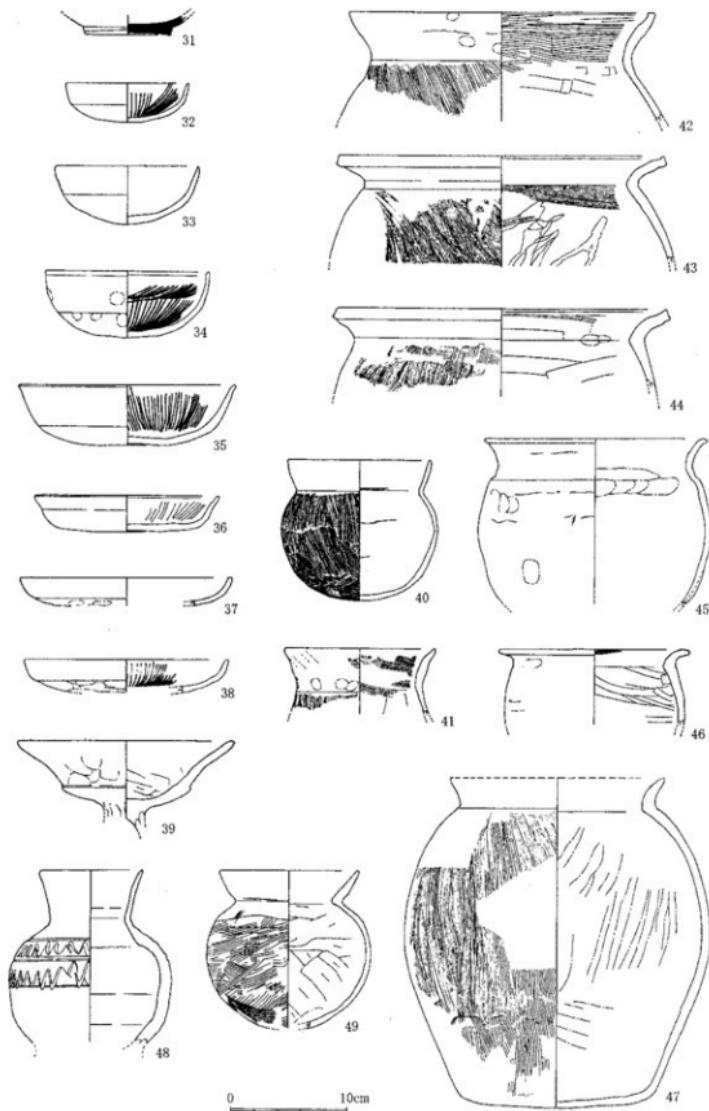
SR-02出土遺物

土器器(第13・14図 図版十七~十九)

21~24は体部が長胴形と推定される羽釜である。21・22・24は体部外面にタテ方向のハケメが施され、

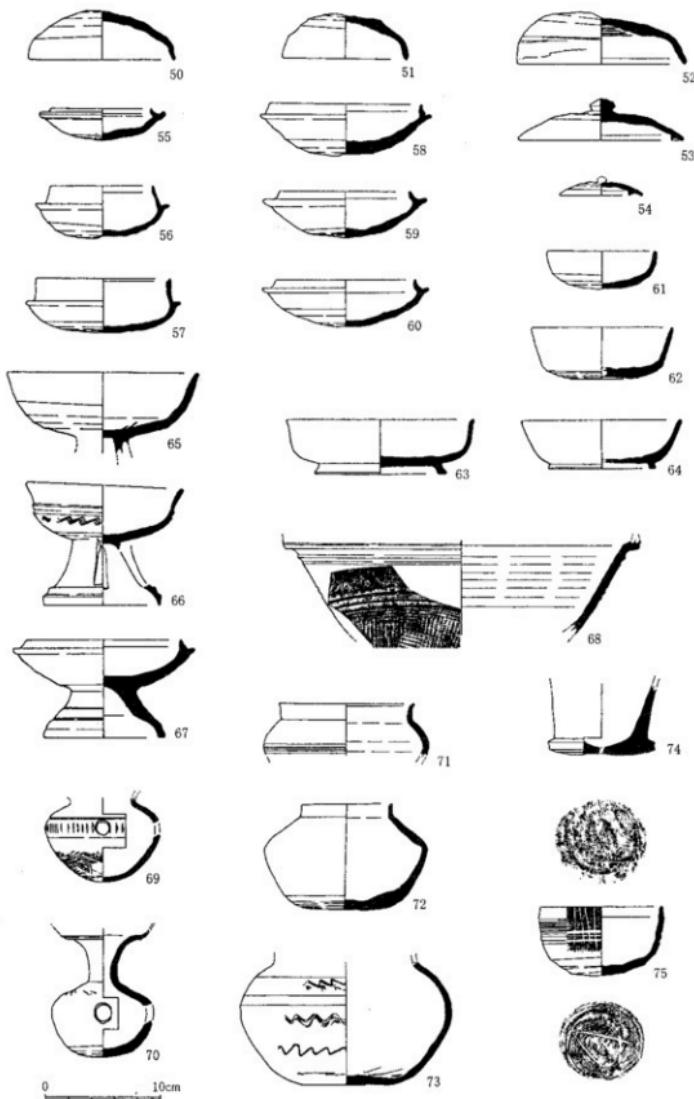


第13図 A区第4遺構面S R-02出土遺物(1)

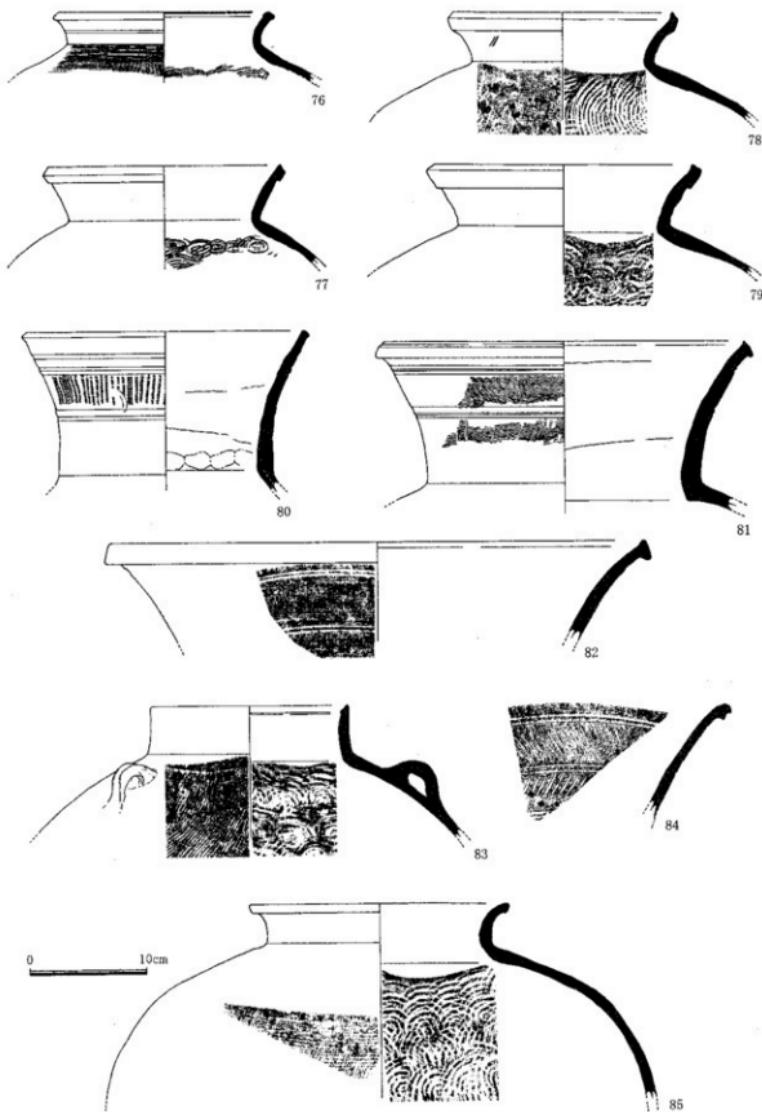


第14図 A区第4遺構面S R-02出土遺物(2)

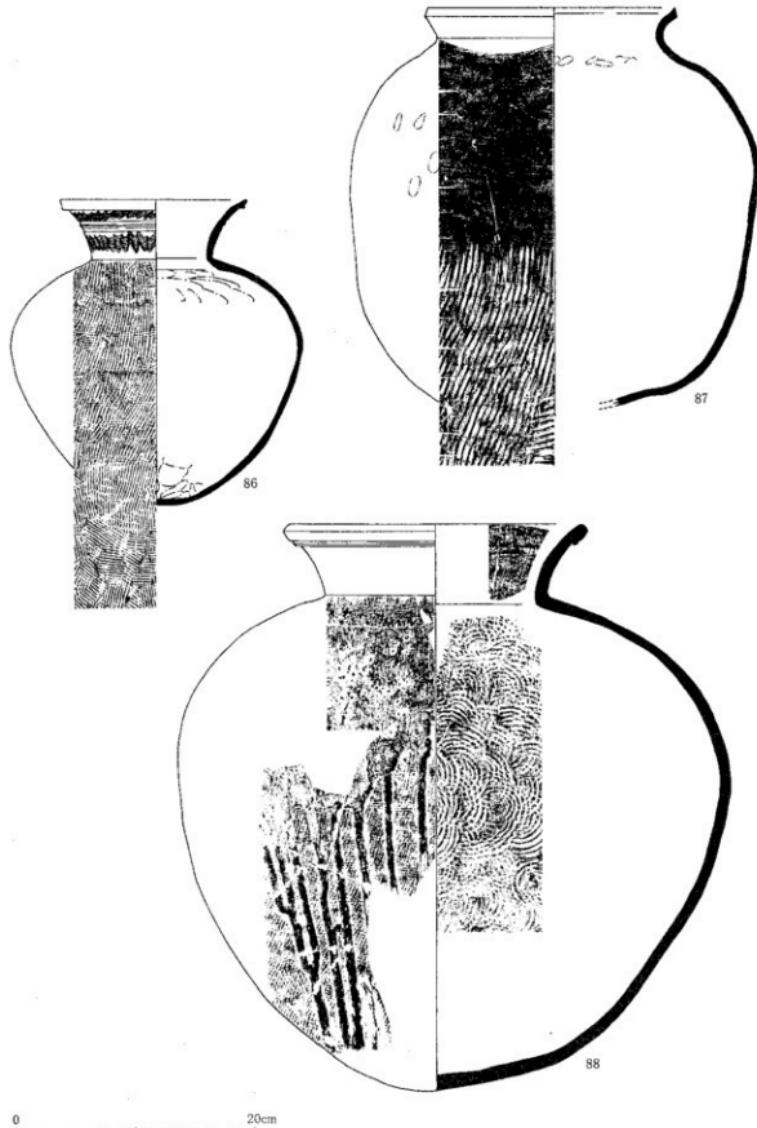
頸部が「く」の字状に屈曲するもので、飛鳥Ⅰ期に相当する。23は頸部があまり屈曲せずに口縁部へ続くもので、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に相当しよう。胎土はすべて生駒西麓産のものと推定される。25～30は土師器移動式竈の各部位の破片である。25は把手が付く体部側面から焚き口の部分で、内外面に粗いハケメが施されている。通常、焚き口上部に付く庇の形状は不明である。26は掛け口の部分で、内面がヨコハケ、外面上にはタテハケが施されており、内面に煤が付着している。27は庇部分を残し、側面に把手が付けられていた痕跡が残る。全体に摩滅しているが、外面にハケメの痕跡が観察される。28は前面の焚き口部分の破片で、鍔状の庇がそのまま凸帯となって焚き口の側刃へと続いている。外面に細かいハケメが施され、内面は使用時のものと考えられる熱を受けた痕跡が認められる。29は体部側面の破片で、鍔状の凸帯が付く。内外面に粗いハケメが施されており、やはり熱を受けた痕跡が認められる。30は脚部付近の破片である。鍔状の凸帯がそのまま連続して脚となり、先端は丸味を帯びて終わっている。外面に細かいハケメが施されている。なお、28と30は同一個体の可能性が強い。移動式竈の破片はこの他にも10数点出土しており、それぞれ異なるタイプの存在を確認している。31は綠釉陶器の底部で、ケズリダンによる円盤状高台を呈している。釉調は淡緑色で、外面の釉の掛かり具合にはかなりムラがある。32～38は土師器杯である。32は口縁部外面にヨコナデが施され、体部から底部には指頭圧痕が残る。内面には放射状暗文が施されている。飛鳥Ⅲ期に相当する。33は底部が丸い椀形を呈し、口縁部外面にヨコナデ、内面はナデが施されている。飛鳥Ⅰ期に相当する。34は椀形を呈し、口縁端部が内側に肥厚する。外面はナデが施されているが、指頭圧痕も認められる。内面には放射状暗文と口縁部付近にナナメ方向の暗文が施されている。飛鳥Ⅰ期に相当する。35は平らな底部から口縁部が斜め上方に伸び、端部はさらに外反する。外面はヘラミガキ、内面には細かい放射状暗文が施される。飛鳥Ⅰ～Ⅱ期に相当する。36は口縁部が外反した後、やや内側に肥厚する。内面には放射状暗文が施されている。平城Ⅰ～Ⅱ期に相当する。37は口縁端部上面に面を持ち、体部外面の下半に指頭圧痕が認められ、上半部にはナデが施されている。内面はナデである。飛鳥Ⅳ期に相当する。38は内面に細かい放射状暗文を施した後、口縁部をヨコナデ、外面は底部に指頭圧痕が残る。飛鳥Ⅱ期に相当する。39は土師器高杯である。外面に指頭圧痕が残り、内面は板状工具によるナデが施される。布留式期<sup>(39)</sup>のものである。40～45・47・49は土師器壺である。40は球状の体部に直立気味の短い頸部が付く。外面に細かいタテ方向のハケメ、内面はナデが施される。41は頸部があまり屈曲せず外反する。外面に細かいハケメ、内面の口縁部にも細かいハケメが施される。42は口縁端部が内側に肥厚し上面に面を持つ。体部外面はナナメ方向のハケメ、内面は口縁部にヨコハケ、体部には板状工具によるナデが施される。43は口縁部が体部から外反し端部に面を持つ。外面は細かいハケメ、内面はハケメとミガキが施される。44も43と同様の形態で、外面は細かいハケメが施される。45は球形に近い体部から口縁部を外反させ、強いナデにより肩部に段が形成されている。内外面に指頭圧痕が残る。47は平底で長胴形の体部に外反する短い頸部が付き、外面はハケメ、内面は指によるナデの痕が顕著に残る。49は球形の体部に外反する短い頸部が付き、外面ハケメ、内面はヘラケズリが施される。土師器壺も49を除き飛鳥期のもので、40が飛鳥Ⅰ～Ⅱ期、41・42が飛鳥Ⅰ期、43～45が飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に相当し、43・44は体部に把手が付くタイプの可能性もある。47も類例を見ないが、飛鳥期のものであろう。49は古墳時代後期のものと考えられる。46は弥生土器壺で、口縁部は体部から大きく外反し、外面はナデ、内面は板状工具によるナデが施される。48は土師器壺である。3条の沈線の間に2条の波条文が施され、外面はヘラケズリとナデ、内面はナデが施される。体部下半を欠くが、



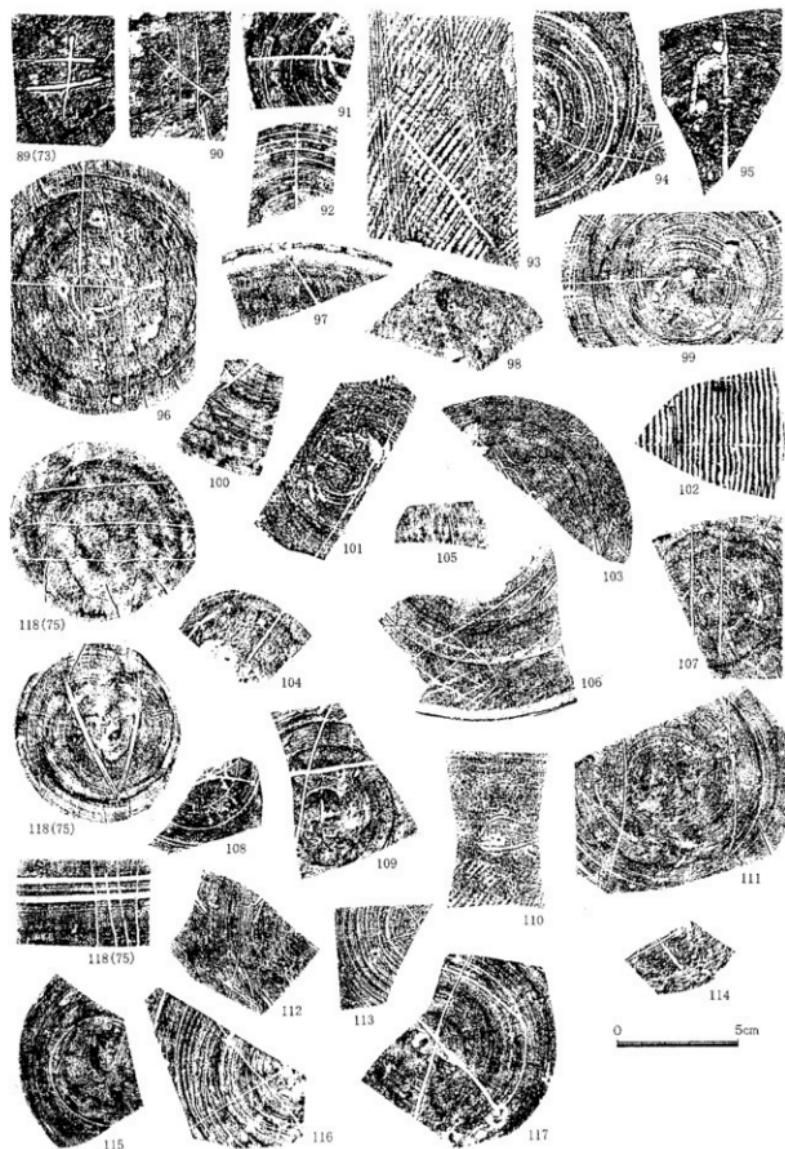
第15図 A区第4遺構面 S R-02出土遺物(3)



第16図 A区第4遺構面S R-02出土遺物(4)



第17図 A区第4遺構面 S R -02出土遺物(5)



第18図 SR-02出土ヘラ記号のある須恵器

須恵器台付壺を模倣して製作されたものであろう。古墳時代中期の終りから後期初頭頃のものであろう。  
須恵器(第15～17図 図版二十二～二十四)

第15図は蓋杯・壺・器台等を、第16・17図には甕類を図示している。蓋杯類は図示した他にも、大量に出土している。型式的には中村編年<sup>(注10)</sup> I～IV型式に相当する各時期のものが出土しているが、特にII～III型式のものが多いようである。また、器面にヘラ記号が施されているものが多く見られた。ここでは65に「/」、73に「#」のヘラ記号が、75の鉢には天井部外面に「V」、内面に「H」、口縁部外面に「III」の3箇所のヘラ記号が施されていた。甕では86・87が内面のタタキを完全に擦り消しており、古い様相を示している。

#### ヘラ記号のある須恵器(第18図 図版二十五)

出土量が多かったので拓影を図示した。110は接合は不可であるか83の甕と同一個体である。

#### 円筒埴輪(第19図 図版二十六)

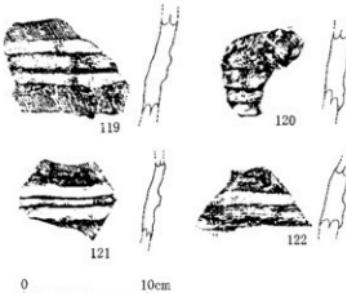
119は幅広の低いタガで、外面はタテハケ、内面はナデが施される。焼成は良好で断面は灰色を呈している。120も幅広の低いタガで、外面はタテハケ、内面はナデが施される。焼成は良好で断面は黒色を呈している。121は須恵質で、タガの断面形は「M」字状を呈し、外面はタテハケ、内面はナデが施される。122は幅広のタガに外面はタテハケが施される。断面は灰色を呈する。これらの埴輪はいずれも外面が一次調整のタテハケのみであることから、川西編年<sup>(注11)</sup>のV期に相当しているものと考えられる。

#### 銭貨(第20図 図版二十六)

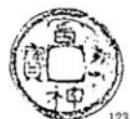
123は皇朝十二銭のひとつである「富寿神宝」である。銭貨はこの1点のみの出土である。

#### 石製品・玉類・石器(第21図 図版二十六)

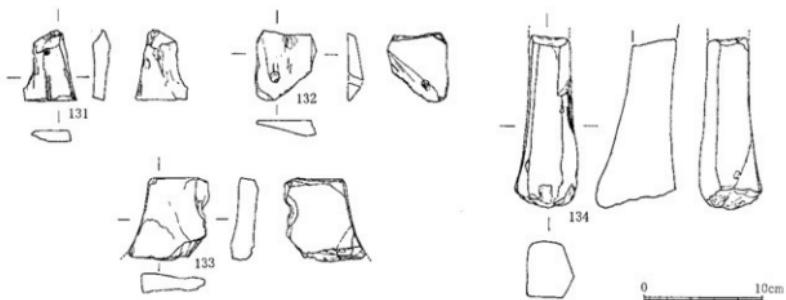
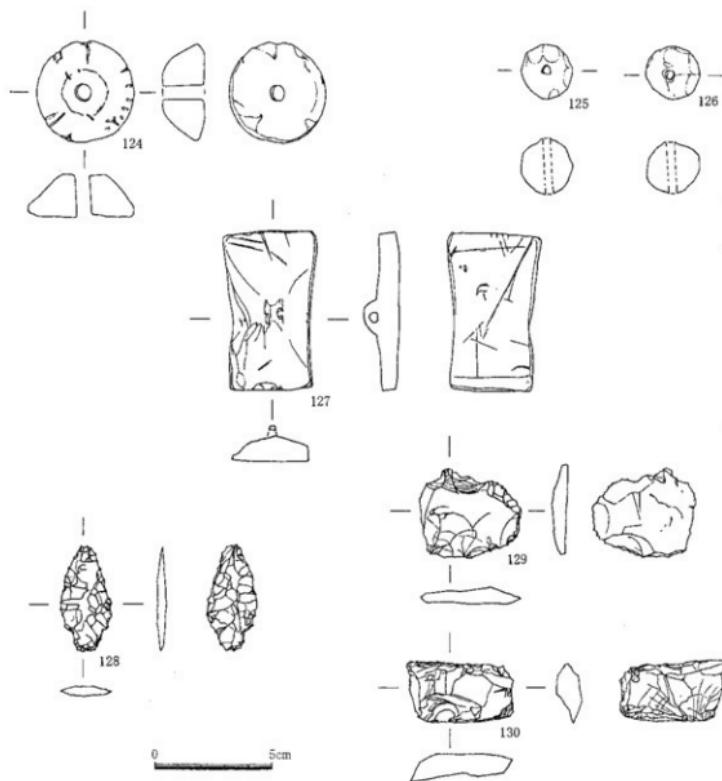
124は滑石製鋤錐車である。磨耗が著しいため線刻の有無は不明である。約6mmの穿孔が施される。127も滑石製品で、いびつな長方形を呈し、中央に約3～5mmの穿孔が施された鋤状の突起を持ち、背面はほぼ平坦を成す。盾或いは扉を模倣したような形状を呈している。125・126は土製玉である。ほぼ球状を呈し、中央に約2～3mmの孔が貫通する。表面は丁寧に仕上げられ鈍い光沢を持つ。128は有茎式石鏡である。サヌカイト製。129・130はサヌカイトの剥片である。129には周囲約2分の1に刃が作り出されている。133・134は砥石である。133は板状で使用面が2面あり、かなり使い込まれているため中央部が凹んでいる。砂岩製である。134は柱状で使用面が5面あり、これもかなりよく使い込まれている。石材は不明である。131・132は図版作成後、同一個体であることが判明し、接合することができた。接合後の全長は約11.5cmで、研磨により何らかの製品の製作過程であったのか、途中で砥石として転用されたのか不明である。径約6mmの穿孔途中の孔(131)と約6～9mmの孔が斜めに貫通している(132)。



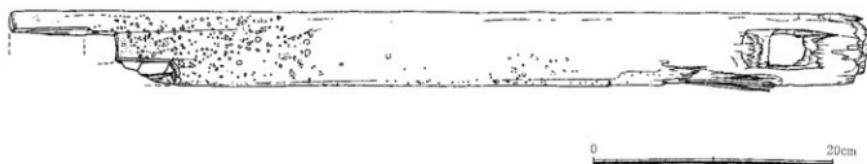
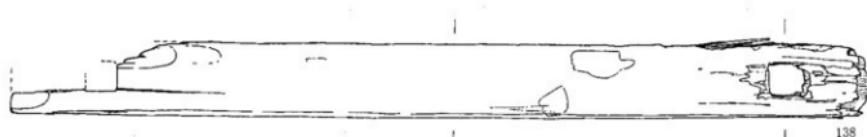
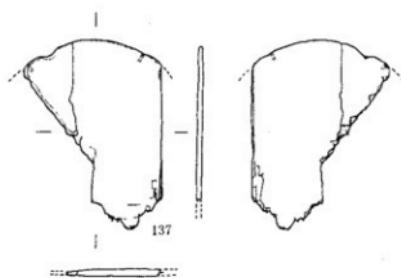
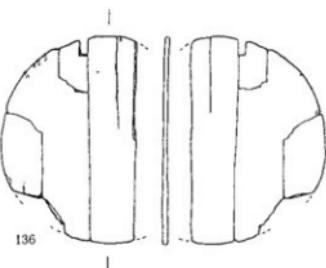
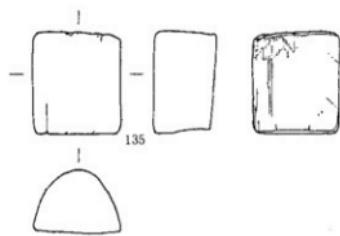
第19図 A区第4遺構面S R-02出土円筒埴輪



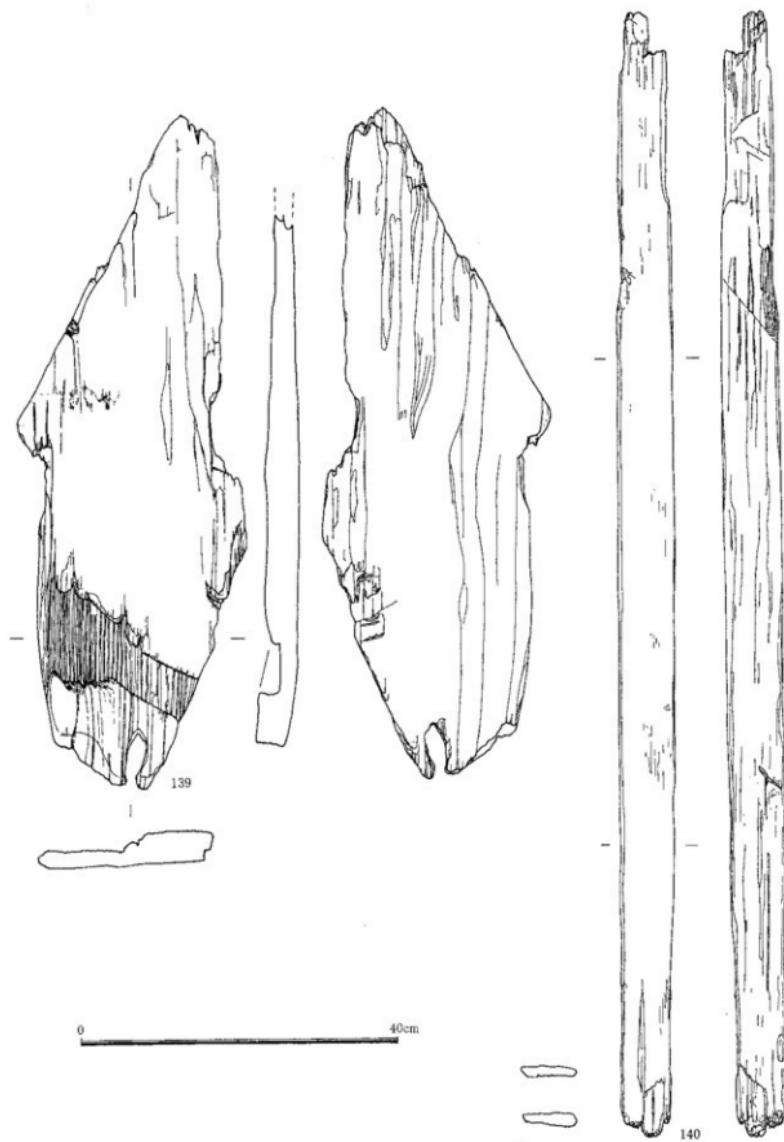
第20図 「富寿神宝」



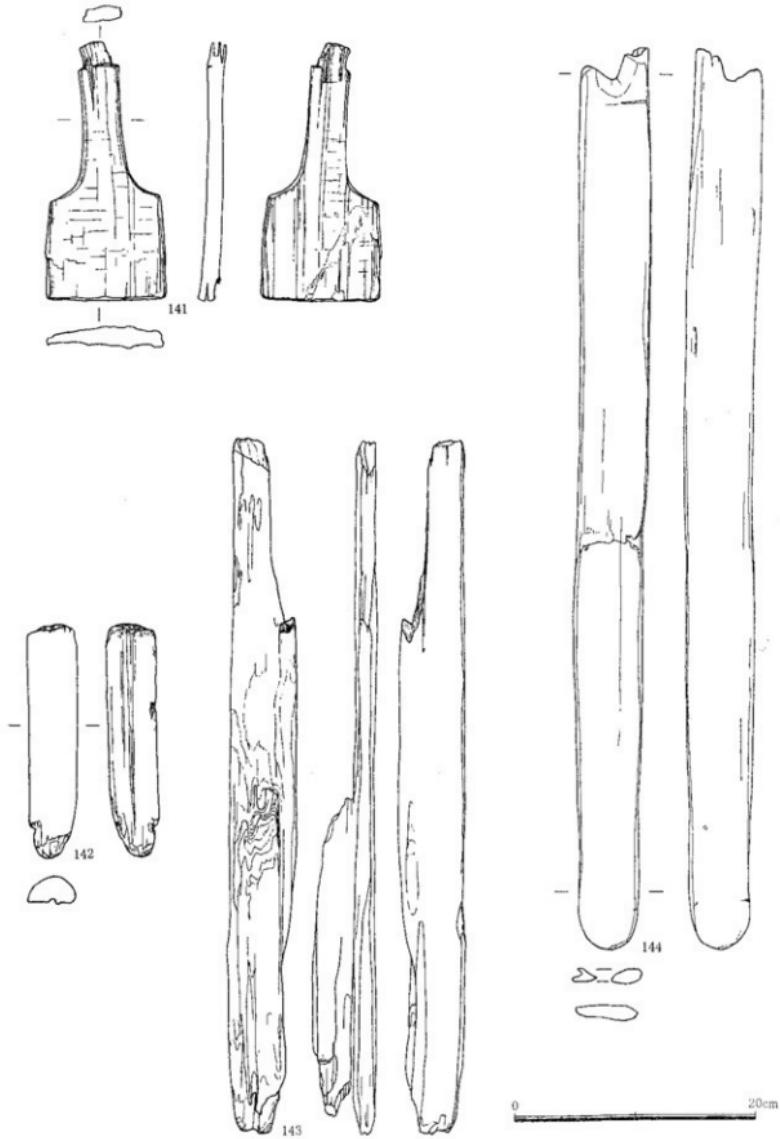
第21図 A区第4造構面 S R -02出土石製品類



第22図 A区第4遺構面S R-02出土木製品(1)



第23図 A区第4造構面S R-02出土木製品(2)



第24図 A区第4遺構面S R-02出土木製品(3)

## 木製品(第22~24図 図版二十七・二十八)

135は断面形がカマボコ状を呈している。用途は不明である。136・137は曲物の底板で、目釘の穴が側面にある。138は両端に枘(はぞ)穴が空けられている。139~144も板材であるが用途は明らかではない。141は羽子板状を呈しているが、用途は不明である。

### 獸骨類

牛、イノシシの骨があるが、ほとんどが馬の骨(写真2)である。量的にはほぼコンテナ1箱分が出上している。部位の判明しているものを挙げると、牛(脛骨・距骨・中手骨・桡骨)、イノシシ(距骨)、馬(歯・上腕骨・距骨・頭骨・下顎骨・末節骨・中手骨・中足骨・基節骨・寛骨・尺骨・桡骨・脛骨・大腿骨・肩甲骨)等がある。



S R -02の出土遺物の内容は古墳時代後期のもの  
が圧倒的に多く、この時期を中心として流れていった

写真2 S R -02出土馬骨

ものと推定されるが、出土遺物の時期は奈良時代を下限としており、これがS R -02の埋没時期を示しているものと考えられる。よって本遺構面の時期を古墳時代後期~奈良時代と推定している。

## 第3節 B区の調査

B区はA区の南東約9mに設定した調査トレンチで、調査前の地表面の標高はT.P.+22.2mを測った。

B区では遺構面を3面検出した。このうち上層の2面はA区で検出した第1・2遺構面に相当しているが、第3・4遺構面に相当する面は検出されなかった。最下層で検出した遺構面は出土遺物より古墳時代前期と考えられ、A区にはこれに対応する遺構面がなかったので新たに第5遺構面として設定した。

### 第1遺構面

II層上面で検出しており、検出面の標高はT.P.+22mを測った。

#### 遺構

#### 溝群

南北方向に走る複数の溝を検出した。検出状況から鵝溝と考えられる。

#### 遺物

I・II層から近世の染付の他、土師器皿、瓦器椀等の小片が出土している。

本遺構面は近世~近代にかけての耕作面であると考えられる。

### 第2遺構面

III層上面で検出しており、検出面の標高はT.P.+21.9mを測った。

## 遺構

### 溝群

北東から南西方向に走る複数の溝を検出した。検出状況から鋤溝と考えられる。

### 遺物

VI層より瓦器碗、土師器皿、須恵器等の小片が出土している。

本遺構面は鎌倉時代頃の耕作面であると考えられる。

### 第5遺構面

VI層上面で検出しており、検出面の標高はT.P.+21.2mを測った。A区とは様相が異なり、新たに古墳時代前期を中心とする遺物包含層であるV層を確認することができ、この層を除去するとVI層をベースとして溝SD-02が検出された。

遺構(第25図 図版十・十一)

### SD-02

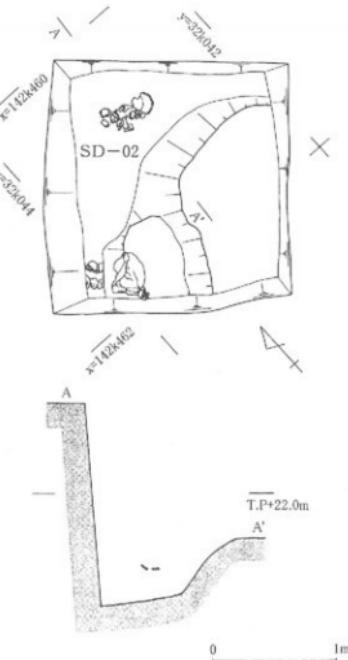
調査区の南側に僅かに肩を残した状態で検出した。調査区が狭小なため全体の規模は不明であるが、深さは約0.6mを測り、ほぼ北東～南西方向に走る溝状の遺構と推定される。埋土は緑灰色粘土、暗オリーブ灰色砂混じり粘質土と暗灰色粘土の混合層、最下層には灰白色砂層が堆積していた。遺物は古墳時代前期に属する土師器壺、高杯、壺、小型丸底壺等が出土している。また、埋土を水洗したところ、白玉、土玉が出土した他、イノシシ、牛、馬等の獸骨が出土している。

### 遺物

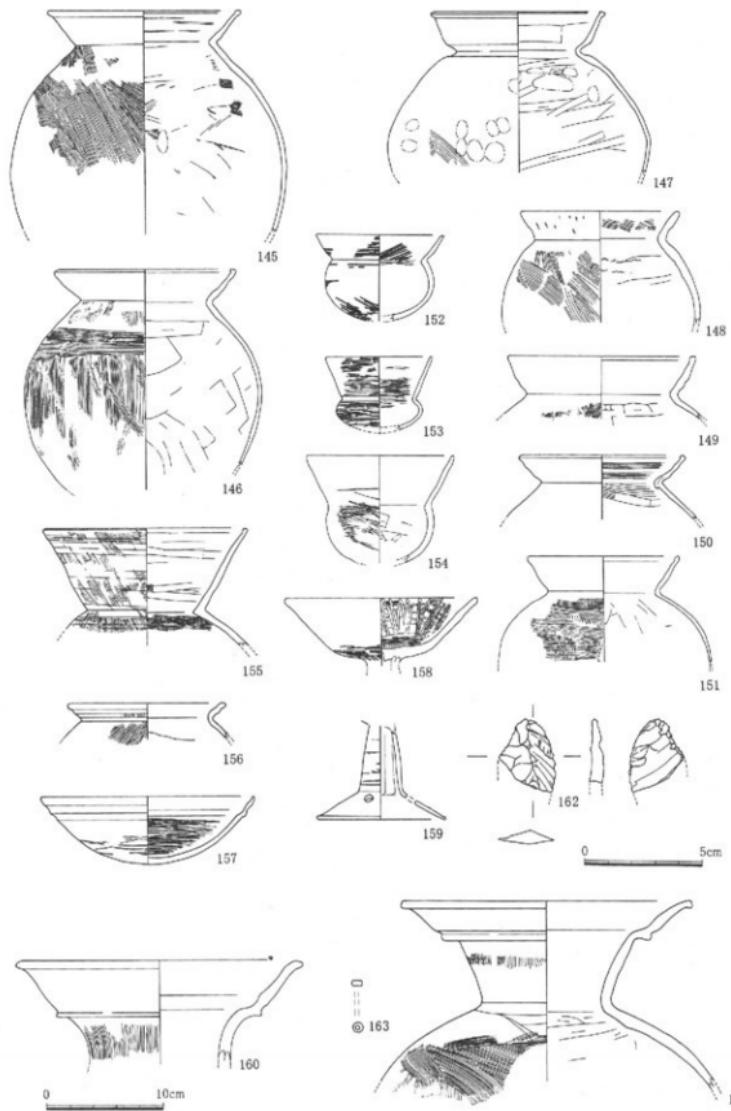
SD-02からは古墳時代前期の土師器壺・壺・高杯等が出土している。また本遺構面の直上に堆積するV層からは古墳時代前期の土師器と最古型に属する須恵器が出土している。

SD-02出土遺物(第26図 図版二十九～三十一)

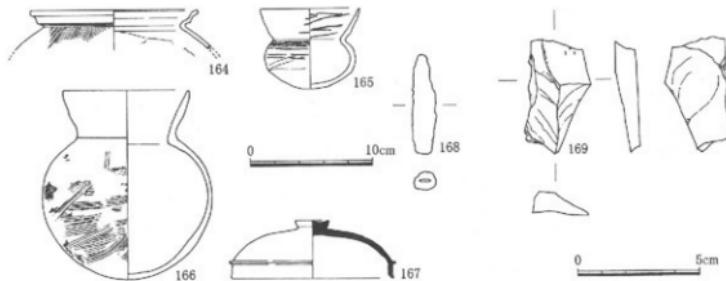
145～151は壺である。145は球形の体部に外反する口縁部が付き端部は肥厚する。体部外面はハケメ、肩部にヨコナデを施し、内面はヘラケズリが施される。外面に煤が付着する。146は球形の体部に内湾気味の口縁部が付き、端部は内側に肥厚する。外面はタテハケの後、肩部にヨコハケ、内面はヘラケズリが施される。外面に煤が付着する。147は口縁端部が外反した後、外側に肥厚する。外面はハケメの後ナデを施し、特に体部と頸部の境界には強いヨコナデが施されている。内面にヘラケズリが施されるが、指頭圧痕が残っている。外面に煤が付着する。148は口縁部が外反した後、端部は丸く終わる。体部外面は粗いナナメ方向のハケメ、内面はヘラケズリで、口縁部にはハケメが施される。全体に器壁は厚手で



第25図 B区第5遺構面平面図



第26図 B区第5遺構面SD-02出土遺物



第27図 B区V層出土遺物

ある。外面に煤が付着する。149は内湾気味の口縁部で端部はやや内側に肥厚する。体部外面はハケメ、内面は口縁部のやや下までヘラケズリが施される。外面に煤が付着する。150は内湾気味の口縁部で端部をやや内側に肥厚させる。体部外面ヨコナデ、内面はヘラケズリとハケメが施される。外面に煤が付着する。151は内湾気味の口縁部の端部をやや内側に肥厚させ、内傾する面を持つ。体部外面タテハケの後、肩部にヨコハケ、内面はヘラケズリが施される。外面に煤付着。152～154は小型丸底壺である。152は体部から大きく外反する口縁部が付き、内外面には細かいヘラミガキが施される。153は小さい体部に大きく発達した口縁部が付き、内外面に細かいヘラミガキが施される。154は口縁部の外反の度合いは少ない。体部外面はナデ、内面にヘラケズリが施される。155は直口口縁壺である。体部から直線的に伸びる口縁部は端部を内側に肥厚させる。外面はハケメ、体部内面は肩部にヨコハケ、下半はヘラケズリが施されている。156は「S」字状口縁を呈する東海系の台付壺である。外面に粗いハケメが施され煤が付着する。157は有段口縁鉢で外面はナデとヘラミガキ、内面はナデが施される。158・159は高杯である。158は口縁部が大きく開き端部は丸く終わる。外面ナデで、底部付近にハケメとヘラミガキが施される。内面はヘラミガキである。脚部との接合部分は杯部が凸状に膨らんでおり、軸心の孔がある。159は脚部のみで、外面ナデとヘラミガキ、3箇所に円形の孔がある。160・161は複合口縁壺である。160は直立気味に立ち上がる頸部から大きく外反する口縁部で、端部はさらに外反する。外面頸部にハケメが残る。内面はナデが施される。161は球形の体部から外反気味に伸びる頸部に大きく外反する口縁部が付き、端部はさらに外反している。外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。出土した土師器は概ね布留式前半<sup>(註12)</sup>のものが中心と考えられる。162はサスカイトの剥片である。表面は風化しており二次加工は認められない。163は白玉である。径4mm、厚さ2mmで約1mmの孔がある。緑色を呈し、滑石製。

#### V層出土遺物(第27図 図版三十・三十一)

164は「S」字状口縁を呈する東海系の台付壺の破片である。165は小型丸底壺である。体部外面は細かいヘラミガキと底部にヘラケズリが施される。166は直口口縁壺である。球形の体部から直線的に立ち上がる口縁部が付き、体部外面は粗いハケメが施される。167は須恵器蓋杯である。天井部と口縁部の境界に上外方に伸びる稜と中央部が凸形に膨らむつまみを持つ。中村編年のI-1型式に相当する。168は鉄製品であるが、不明品である。169はサスカイト剥片である。表面の風化が著しく自然面を多く残しており、二次加工は認められない。

### 獣骨類(写真3)

V層から鹿角、S D-02からイノシシ(上顎骨)、鹿角、馬(背骨)、牛(下顎骨)等が出土している。

本遺構面の時期であるが、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

### 第4節 C区の調査

C区はA区の南約3mにはほとんど近接して設定した調査トレンチで、調査前の地表面の標高はT.P.+21.8mを測った。

C区で検出された遺構面は3面であり、それぞれ既述の第1~3遺構面に相当している。

#### 第1遺構面

II層上面で検出しており、検出面の標高はT.P.+21.6mを測った。

##### 遺構

##### 溝群

A・B区と同様、南北方向に走る複数の溝を検出した。鍛溝と考えられる。

##### 遺物

遺物はI・II層より近世の染付や陶器、土師器皿等の小片が出土している。

本遺構面は近世~近代の耕作面であると考えられる。

#### 第2遺構面

III層上面で検出している。

検出面の標高はT.P.+21.3mを測った。

##### 遺構

##### 溝群

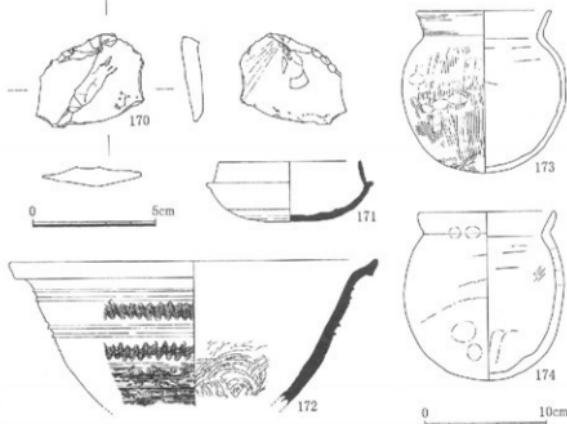
北東から南西方向に走る複数の溝を検出した。鍛溝と考えられる。

##### 遺物

III層からは中世の土師器皿、瓦器碗等の小片の他、古墳時代の土師器、須恵器等も出土している。



写真3 SD-02出土獣骨類



第28図 C区III・IV層出土遺物

### III層出土遺物(第28図 図版三十二)

171は須恵器杯身で中村縦年のI-5~II-1型式に相当する。172は須恵器器台である。外面に格子タタキとカキメ、内面は同心円タタキが施される。I-4~5に相当する。173は土師器甕で、球形の体部に短い頸部が付き、外面にタテ方向の粗いハケメ、内面はナデが施されている。

本遺構面は鎌倉時代頃の耕作面と考えられる。

### 第3遺構面

A区で検出したS R-02の埋土であるIV層上面で検出している。検出面の標高はT.P.+20.7mを測った。遺構はピットと土坑を検出した。

遺構(第29・30図 図版十二)

S P-01

検出規模は $0.3 \times 0.33m$ 、深さ $0.22m$ を測り、平面形は不整円形を呈していた。須恵器、土師器、製塙土器等の小片が少量出土している。

S P-02

S K-02に接していた。検出規模は $0.24 \times 0.31m$ 、深さ $0.16m$ を測り、平面形は長円形を呈していた。遺物は須恵器、土師器等の小片の他に、馬の下顎骨が出土している。

S K-02

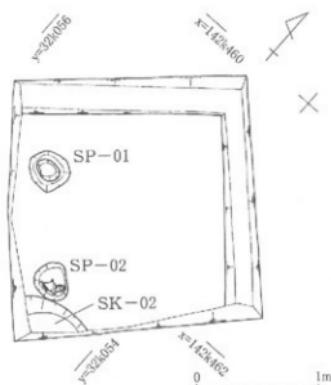
調査区の南隅で検出したため全体の規模は不明であるが、検出規模は $0.34 \times 0.51m$ 、深さは $0.1m$ を測った。遺物は土師器の小片が出土している。

### 遺物

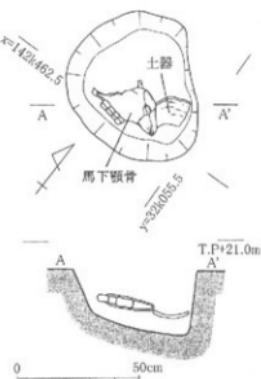
遺構からの出土遺物はいずれも小片のため、ここでは主に包含層出土遺物について説明する。

### IV層出土遺物(第28図 図版三十二)

170はサヌカイトの剥片である。表面は風化を受けており、二次加工は認められない。174は土師器甕である。器壁が厚く「く」の字状に外反する短い頸部が付き、内外面に指頭圧痕とナデの跡が残る。表面は二次的に熱を受けて、白っぽく変色している部分がある。製塙土器の一種(甕型I式併行?<sup>(注13)</sup>)と推定される。また、この他にもIV層及び第3遺構面 S P-01からは製塙土器が数点出土している。(第31図)いずれも器壁は薄く、口縁部がすぼまる形態のもので、丸底I式併行<sup>(注14)</sup>に相当するものであろう。175・178・179にはタタキメが残る。



第29図 C区第3遺構面平面図



第30図 S P-02平面図

既述したようにA区と同様、第3遺構面のベース層となるIV層はS R -02の埋土であり、本遺構面は検出面と層位の関係からA区第3遺構面に対応しているものと考えられる。

## 第5節 D区の調査

D区はA区の南東約15mに設定した調査トレンチで、調査前の地表面の標高はT.P.+22.3mを測った。

土層断面図(第4図)で示したように、本調査区では基本層序Ⅲ～V層が欠落しており、確認された遺構面は2面である。

### 第1遺構面

II層上面で検出しており検出面はT.P.+22.2mを測った。

遺構

溝群

南北方向に走る複数の溝を検出しており、鍛溝と考えられる。

遺物

I・II層から近世の染付片や陶器片、瓦器碗や土師器皿等の小片が出土しているが、ここで図示できるような遺物はなかった。

本遺構面は近世～近代の耕作面であると考えられる。

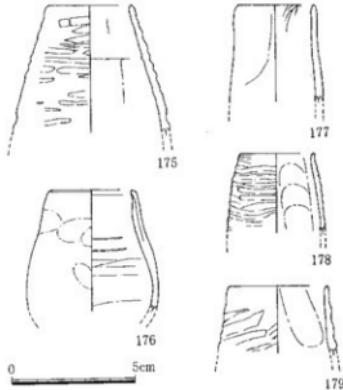
### 第5遺構面

VI層上面で検出しており検出面の標高はT.P.+21.9～22mを測った。遺構を検出していないので、時期に関しては不明である。また、B区で存在した古墳時代前期の遺物包含層であるV層を確認していないが、本遺構面がB区で検出した第5遺構面に対応しているものと推定される。

## 第6節 E区の調査

E区はA区の南約11mに設定した調査トレンチで、調査前の地表面の標高はT.P.+22～22.1mを測った。

検出された遺構面は3面で、それぞれ既述の第1・2・5遺構面に相当している。土層の堆積状況は土層断面図(第4図)に示したように、本調査区ではVI層が南東から北西に傾斜する斜面として検出され、そのためIII層は本調査区で終わっていることが確認された。I・II層も東へ行くにつれて、その層厚を薄くしており、本調査区より東側ではD区で示したようなIII～V層が欠落する上層の堆積状況となっているものと推定される。



第31図 C区出土製塙土器

## 第1遺構面

II層上面で検出しており検出面はT.P.+21.6~21.7mを測った。

### 遺構

#### 溝群

南北方向に走る複数の溝を検出しており、鋤溝と考えられる。

### 遺物

I・II層より近世の染付や陶器片、中世の土師器皿や瓦器梶片が出土している。

本遺構面は近世~近代の耕作面である。

## 第2遺構面

III層上面で検出しており、検出面はT.P.+21.2~21.6mを測った。調査区の東側ではこのIII層が欠落しているためVI層上面での検出となった。VI層上面においてビットが検出され、また、調査区の北壁断面(第4図)でもVI層から掘り込まれたビットを確認したが、第5遺構面の遺構として扱うこととした。

### 遺構

#### 溝群

III層上面で北東から南西方向に走る複数の溝を検出しており、鋤溝と考えられる。しかし、VI層上面では鋤溝を確認していないことから、斜面の上部のIII・IV層は後世の削平によって消失したものと考えられる。

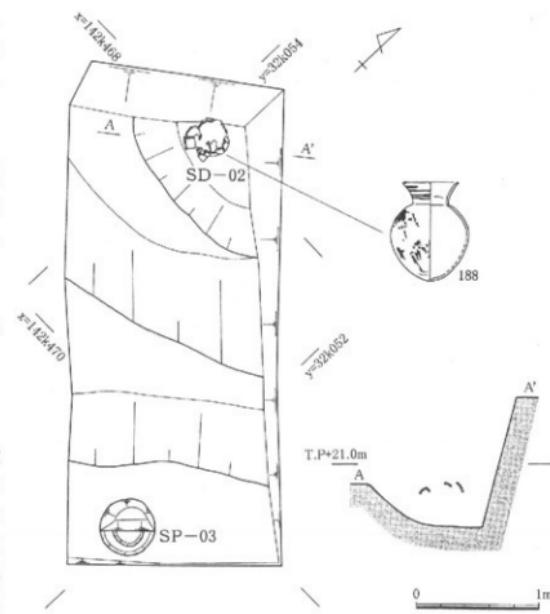
### 遺物

III層から中世の土師器皿や瓦器梶の小片の他、古墳時代の須恵器、土師器等の小片が出土している。

本遺構面は鎌倉時代頃の耕作面と考えられる。

## 第5遺構面

VI層上面で検出しており、検出面はT.P.+20.9~21.6mを測った。VI層をベース面にして南東から北西への斜面が形成され、斜面下部の調査区の北隅では溝を検出し、また斜面上では



第32図 E区第5遺構面平面図

ピットを検出した。

#### 遺構

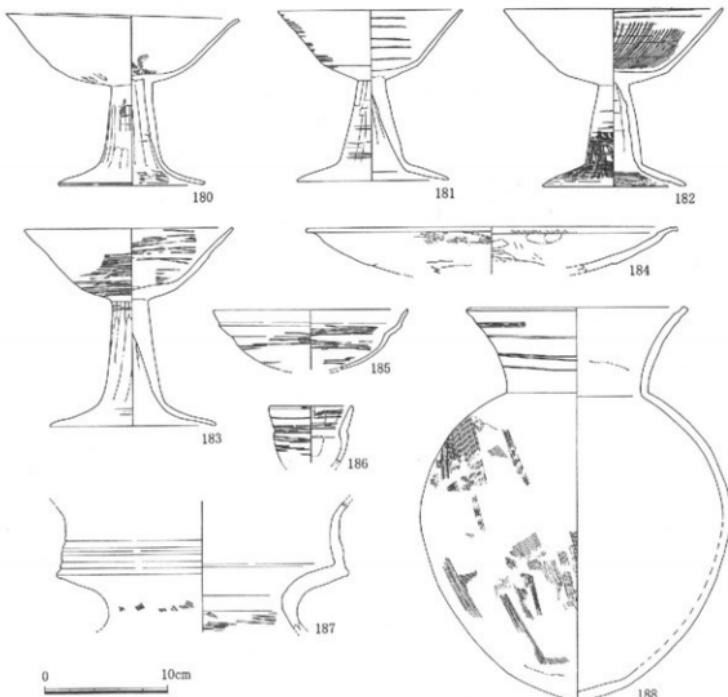
(第32図 図版十三・十四)

S D - 02

調査区の北隅を横切るように北東から南西方向に走っていた。全体の規模は不明であるが深さは約0.5mを測った。遺物は古墳時代前期に属する土師器壺、甕等が出土しており、方向や位置関係等から、B区で検出した溝S D - 02の続きを検出したものと考えている。

S P - 03

第2遺構面の項でも述べたように、斜面上部である調査区の南東側のVI層上面で検出した。0.44×0.47mを測る不整円形の掘り形で、径約25cmの柱痕らしきものが認められた。この部分が最も深く、約27cmを測った。遺物は出土していないので所属時期は明確ではない。



第33図 E区第5遺構面 S D - 02出土遺物

## 遺物(第33図 図版三十三・三十四)

### S D-02出土遺物

B区と同様、古墳時代前期の土師器が出土している。

180～183は高杯である。180は杯部と脚部の接合部分の杯部側が凸状に突出しており、軸心と思われる孔が見られるが、181～183は逆に杯部側が凹状をなしている。180が布留式後半、181～183が布留式前半に相当する。185は有段口縁鉢で、器壁は薄く精製された胎土を使用している。内外面ともヘラミガキが施され、赤色を呈している。186は小型丸底壺である。器壁は厚く、直立気味の口縁部となっている。内外面とも細かいヘラミガキが施される。187は複合口縁壺である。口縁端部は僅かに欠損するが外反して終わる。四国系の壺の特徴を示している。188は直口口縁壺で口縁部は外反し、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。185～188も布留式前半に相当する。

既述したように、検出したS D-02はB区で検出したS D-02と同一遺構と推定され、本遺構面の時期は古墳時代前期と考えられる。

## 第5章　まとめ

今回の調査では各調査区で検出した遺構面の数は異なるものの、調査地全体では合計5面の遺構面を検出したことになる。それぞれの遺構面の時期を整理すると以下のようになる。

第1遺構面	近世～近代
第2遺構面	鎌倉時代～近世以前
第3遺構面	奈良時代以降～鎌倉時代以前
第4遺構面	古墳時代後期～奈良時代
第5遺構面	古墳時代前期

A区以外の調査区では調査面積が狭小のため、造構の広がりを具体的に検出することができなかつたが、調査結果から調査地の各時期の様相を述べることで、簡単ではあるが本調査報告のまとめとしたい。  
弥生時代以前

今回の調査では繩文・弥生時代に相当する遺構は検出されなかったが、A区で検出した自然河川S R-02出土遺物中に第V様式の弥生土器が含まれていることから、調査地近辺(特にS R-02の上流にあたる調査地東側一帯)にこの時期の遺構の存在が推定される。

### 古墳時代前期

第5遺構面がこの時期に相当する。調査地の東側に設置したB・E区で検出した溝S D-02は、その検出状況から調査地を北東から南西方向に走り、さらに調査地外へと続いているものと想定されるが、南西端は府教委の調査で検出された古墳時代～奈良時代の自然河川(第3遺構面自然河川286<sup>(注15)</sup>)によって切られていたようである。今回の調査ではこれ以外に当該期に相当する遺構を検出していなかったため、現時点での溝の性格云々を述べることは差し控えるべきであるが、調査地点の南東には古墳時代前期の

遺物が出土した鍋田川遺跡の存在が知られており、今回検出したSD-02はほぼ同時期の様相を示していることから、これに関連する遺構と推定される。鍋田川遺跡は昭和33年、調査地点の東方約200mに流れている鍋田川の砂防堰堤建設工事中に、多数の土器が出上したことがきっかけで発見された遺跡である。現在、阪奈道路登り線が通る大東橋付近がそれにあたる。出土遺物は未報告であるが、現在、市教委に保管されている。その内容は布留式期の土器が多量に出土しており、特に高杯の量が多かったとされている。遺物は土器以外に、滑石製有孔円板・卜骨・刻骨<sup>(註16)</sup>等の特殊な遺物が出土していることから、通常の集落というよりはむしろ祭祀に関連していた場所であった可能性が強いと推定されている。今回の調査結果によって、同時期の遺構が西側に広がる可能性が出てきた。

#### 古墳時代後期～奈良時代

SR-02を検出した第4遺構面をこの時期に充てた。SR-02は含まれる遺物より、古墳時代後期墳を中心として流れていたものと推定されるが、最終的に埋没したのは奈良時代と考えられ、埋土の堆積状況及び遺物の出土状況より鉄砲水や土砂崩れ等の自然災害のような状況下、或いは山に近いこともあって土砂の堆積作用が速く、比較的短期間の内に埋没したのではないかと推定される。既述したように、弥生土器や古墳時代前期の土器等、古い時期の遺物が含まれているのもこの時の堆積作用によるものと考えられる。結果的に自然河川以外の遺構は検出できなかったが、各型式の須恵器や川西編年V期の円筒埴輪が出土していることから、上流域である調査地の東側に、遺構や後期古墳の存在を推定することができる<sup>(註17)</sup>。なお、SR-02は調査地の西南付近で既述の自然河川286と合流しており、基盤となっているVI層が、比較的深い深度で検出されたB・D・E区はこの両河川に挟まれた微高地であったと考えられる。自然河川286はさらに西側へ続くことが報告されているが<sup>(註18)</sup>、本遺跡内では1989年に今回の調査地点から西へ約150mの地点で市教委による発掘調査が実施されており<sup>(註19)</sup>、そこでも古墳時代後期以降の遺物が多量に出土し、埋没時期が平安時代前期を下らないであろうと推定される自然河川(第3遺構面自然流路SR-02)が検出されている。検出規模と出土遺物の内容は今回検出したSR-02と類似しており、流れている方向と位置関係を考え合わせると両

者は同一の自然河川である可能性が高い。これらの調査結果より、現在は見ることはできないが調査地から西に向かってかなり広い谷が開口し、河川が流れていたものと推定される。ちなみに、調査地付近から西側一帯の小字名は「谷田川」となっており、これらの地形の状況をよく表しているものと考えられる。また、これらの自然河川から共通して出土しているのが製塙土器と多量の馬骨である(写真4)。残念ながら、自然河川の時期幅が広いためこれらの馬骨の所属時期を明らかにすることはできないが、鍋田川遺跡でも同様な状況下での出土が報告されている他<sup>(註20)</sup>、北方の四條畷市域や寝屋川市域でも古墳時代の遺跡から製塙土器と馬骨の出土が報告されている<sup>(註21)</sup>。これらが一体何を意味しているのか、古代に存在したとされている「牧」<sup>(註22)</sup>との関連で今後さらなる検討が必要であろう。

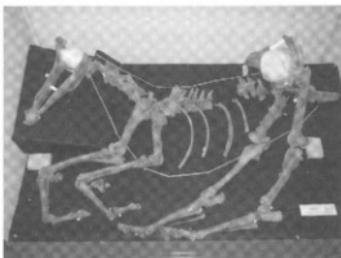


写真4 馬の骨格復元・寺川遺跡1989年度調査出土  
(大東市立歴史民俗資料館展示)

### 奈良時代以降～鎌倉時代以前

第3遺構面がこれに相当し、S R -02が埋没後に形成された遺構面である。A区では落ち込み状の遺構 S K -03と溝 S D -01を検出した。特に S D -01には暗渠と推定される施設が設けられており、またC区では建物に伴うものと推定されるピットを検出していることから、調査では明らかにし得なかつたが敷地内の未調査部分に当該時期の集落跡が存在している可能性を示唆するものであろう。

### 鎌倉時代～近世以前

第2遺構面に相当する。前述のように、何らかの理由で S R -02が埋没し西に開いていた谷が埋められてしまい当地の地形が大きく変貌した結果、河川の流路はA区の北側で検出したほぼ東西方向に流れる S R -01へと移ったものと考えられる。S R -01は出土遺物の下限から、その埋没時期は13～14世紀頃と推定される。川底付近には小石や岩が堆積しており、かなり流れの速い河川であったことが推定される。D区を除く各調査区では北東から南西方向の鶴溝が検出されており、各調査区の調査結果を考え合わせると、当該期では調査地全体が耕作地として利用されていたものと考えられる。

### 近世～近代

第1遺構面に相当する。S R -01埋没後に形成された耕作面である。耕作地は傾斜地を有効に利用するため棚田状に整備され、段の斜面部分には土留めを目的とする杭が打ち込まれていたが、検出した鶴溝の方向は第2遺構面とは異なりほぼ東西方向或いは南北方向に走っていることから、その際に前代とは異なる区割りに整備されたのではないかと考えられる。これはあくまで推定に過ぎないが、耕作地が水田として利用され始めるのはこれ以降のことであろう。この区割りは最近まで生かされていたようで、杭列の位置は昭和31年頃の地形図<sup>[3][23]</sup>に記されていた、水田の境界を示すラインとほぼ一致している事がそれを証明している。また、S R -01は最終的には人為的に埋め戻された様相を呈しており、棚田を整備する際に現在調査地の北側を流れている水路へと改修されたのではないかと推定される。

今回の調査では具体的な遺構の検出こそ少なかったが、古墳時代前期の溝 S D -02は鍋田川遺跡と同時期の遺構の広がりを想定できるものであり、自然河川 S R -02出土遺物の内容はその上流域である東方の丘陵地に存在した遺構の性格を推定できるものであった。また、当地の地形の変遷を明らかにすることことができたことも大きな成果であり、まだ不明な点が多い本遺跡をはじめ、周辺の遺跡を考察するうえで貴重な資料を得ることができたと考えている。今回の調査結果が今後の調査・研究の一助になれば幸いである。

### 註

- (1) 『寺川遺跡発掘調査概要・I』1997大阪府教育委員会
- (2) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- (3) 白神美之「堀摺鉢考」「東洋陶磁」第19号1992
- (4) 『古代の土器4・煮炊具(近畿編)』1996古代の土器研究会編
- (5) 『古代の土器3・都城の土器集成Ⅲ』1994古代の土器研究会編
- (6) 川越俊・「大和出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』1983

- (7) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1993
- (8) 坪之内徹「中世南都の瓦器・瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990
- (9) 米田敏幸「土師器の編年 1.近畿」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』1991雄山閣
- (10) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』1981柏書房
- (11) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- (12) (9)と同じ。
- (13) 近藤義郎他『日本土器製塩研究』1994青木書店
- (14) (13)と同じ。
- (15) (1)と同じ。
- (16) 『大東市史』1973大東市教育委員会  
※「ト骨」はイノシシの肩甲骨に円形の孔が4箇所刻まれている。「刻骨」と呼んでいるのは鹿角に25条の溝が刻まれたもので、その用途として、これに棒状のものを擦り合わせることによって音を出す「シリササラ」ではないかと考えられている。
- (17) (16)と同じ。  
※調査地の東側一帯は昭和40年代・50年代に開発が行われ、未調査のまま消滅した古墳も多かったとされており、工事中に須恵器、円筒埴輪、石棺が出土したと伝えられる城の越占墳、城の越上の段古墳等がある。  
本文の第3章「位置と環境」及び、それの註(17)・(18)を参照。
- (18) (1)と同じ。
- (19) 『寺川遺跡発掘調査報告書』1997大東市教育委員会
- (20) 『鍋田川遺跡発掘調査概要・I』1992大阪府教育委員会
- (21) 『歴史シンポジウム資料 わが国最古の牧～北河内の馬飼集団を考える～』1998寝屋川市・寝屋川市教育委員会
- (22) 河内、特に生駒山地北半の飯盛山西麓から交野台地、枚方丘陵の淀川沿岸にかけての地域は馬の飼育に適した場所で、そのための「牧」が存在していたことが推定されている。市域が属していた讚良郡では『日本書紀』の「沙羅々(讚良)馬創造」、「菟野馬創造」や、『日本靈異記』の「河内國更荒(讚良)郡馬廿里(うまかいのさと)」等の記述がある。
- (23) 昭和31年大東市発行3000分の1都市計画図「大東市全図 共二」

## 参考文献

東宏『大東市地名源流探求』

『大東市史(史料編 I)』1983大東市教育委員会

『概説中世の土器・陶器』1995中世土器研究会編

久光重平・今井育雄『中世・近世渡来銭標本集』1981日本文化資料センター

『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』1998大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター

『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』1999大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター

『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』2000大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター

『日本出土銭鑄造1996年版』1996兵庫県埋蔵銭調査会

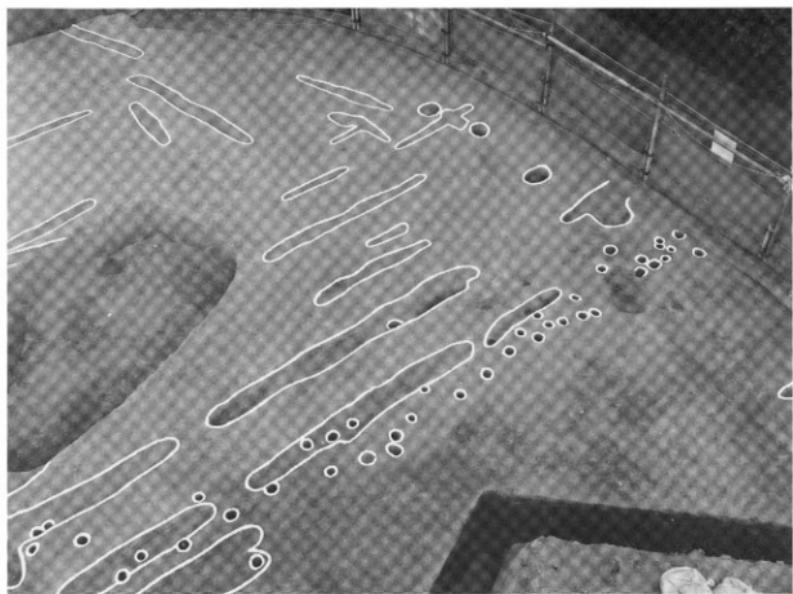
## 報告書抄録

ふりがな	てらかわいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	寺川遺跡発掘調査報告書						
副書名	ガソリンスタンド建設に伴う						
卷次							
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第18集						
編集者名	黒田 淳						
編集機関	大東市教育委員会大東市立歴史民俗資料館						
所在地	〒574-0037 大阪府大東市新町13-30 Tel072-873-3521						
発行年月日	2003年(平成15年)1月10日						

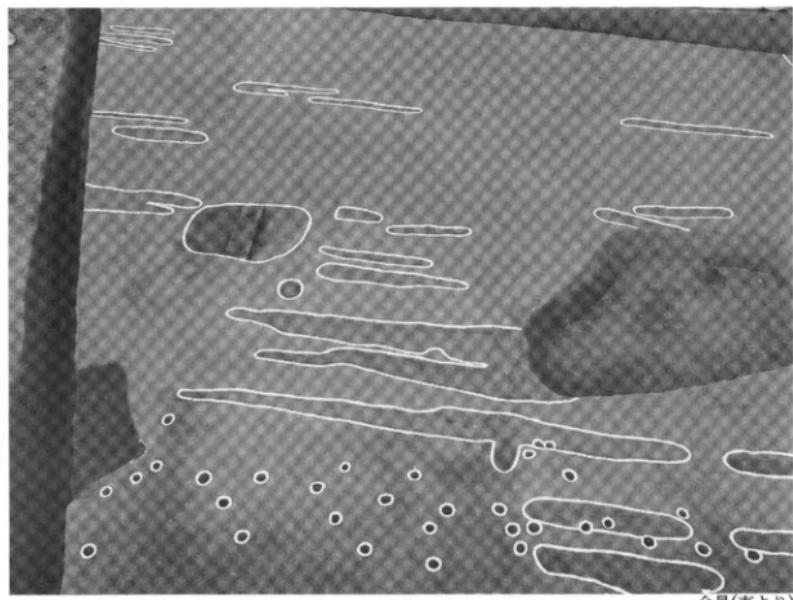
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺川遺跡	大阪府 大東市 寺川5丁目 1117番-1	27218	33	34度 42分 21秒	135度 39分 00秒	1996年 8月5日～ 9月19日	A区205m <sup>2</sup> B区 4m <sup>2</sup> C区 4m <sup>2</sup> D区 4m <sup>2</sup> E区 6m <sup>2</sup> 計223m <sup>2</sup>	ガソリン スタンド 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
寺川遺跡	集落跡	古墳時代前期	溝			土師器(布留壺・壺・高杯・小型丸底壺)	布留式期	
		古墳時代後期 ～奈良時代	自然流路			土師器・須恵器・移動式竈・石製品・円筒埴輪	須恵器I～IV型 式・V期の埴輪・滑石製品	
	集落跡	奈良時代～ 鎌倉時代	溝・土坑・ピット			土師器・須恵器・製塙土器・木製品	丸底I式製塙土器・馬下顎骨・木樋状木製品	
	耕作地	鎌倉時代	自然流路・鋤溝			土師器・瓦器椀・青磁・白磁		
	耕作地	近世～近代	杭列・鋤溝			瓦器椀・染付	杭列は土留め用	

# 図 版

図版一  
遺構（A区  
第1遺構面）

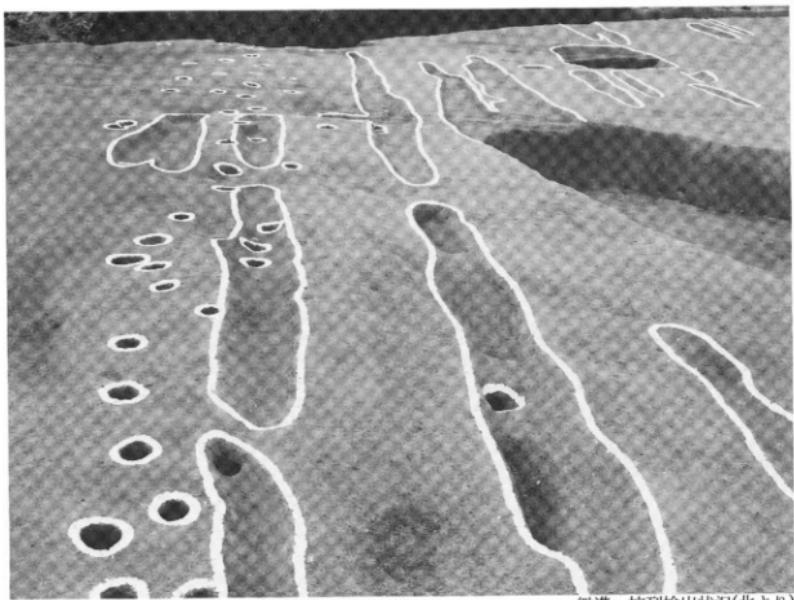


全景(南東より)

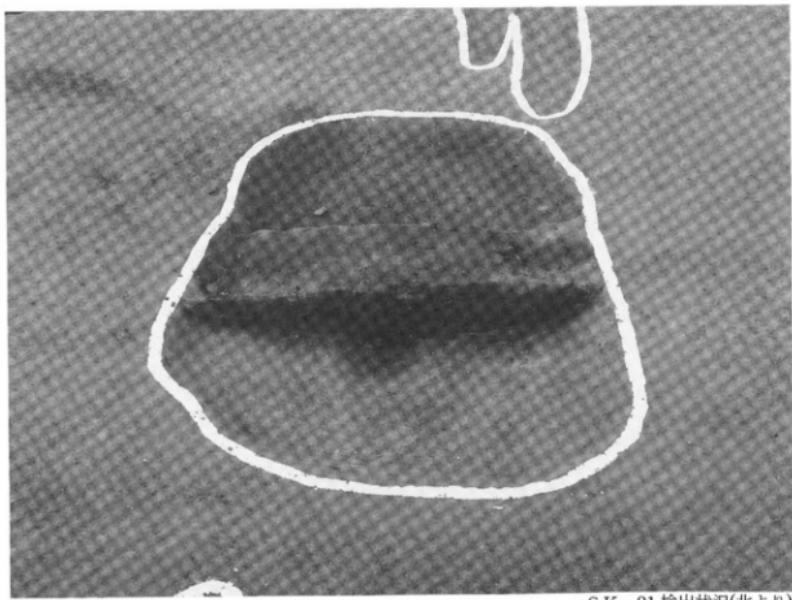


全景(東より)

図版一 遺構（A区 第1遺構面）

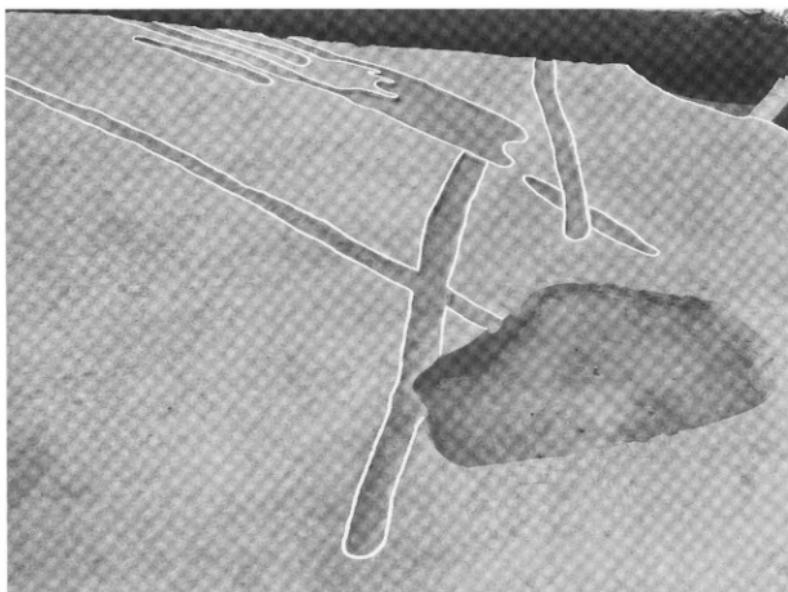


鰐溝・杭列検出状況(北より)

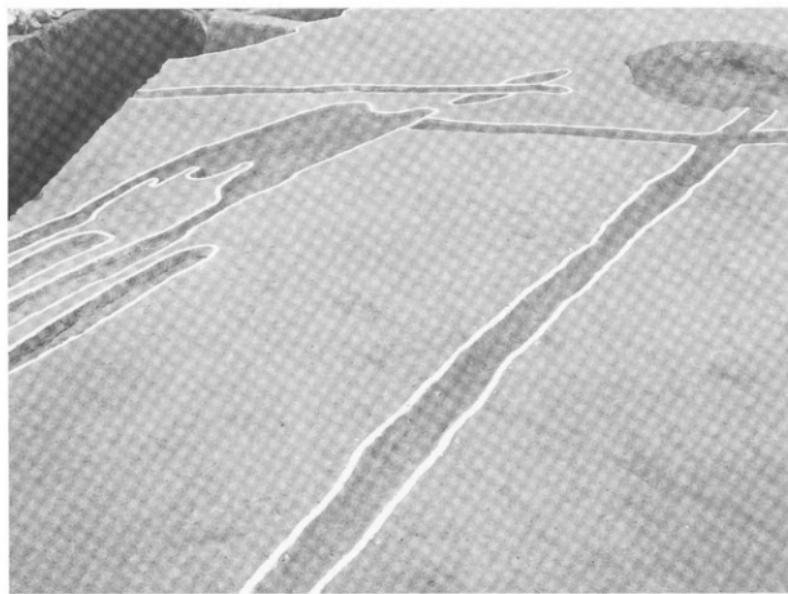


SK-01 検出状況(北より)

図版三 遺構（A区  
第2遺構面）

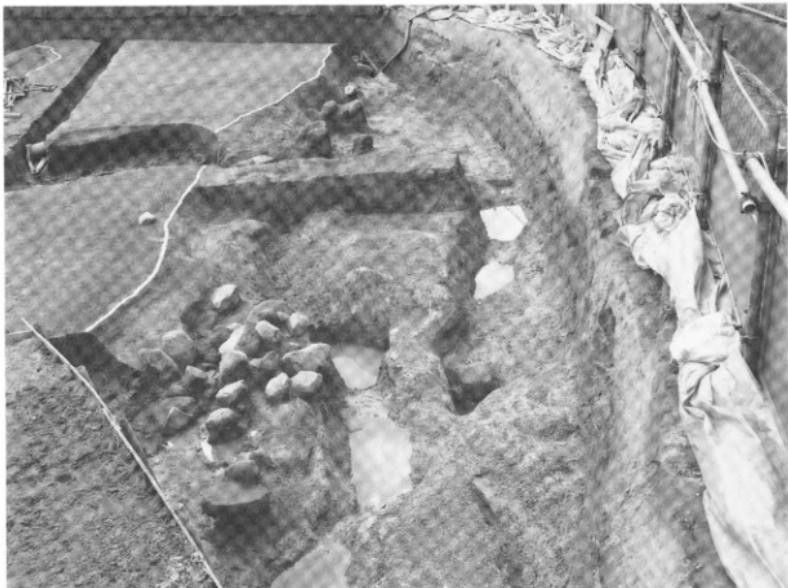


全景(東より)



全景(南より)

図版四  
遺構（A区  
第2遺構面）

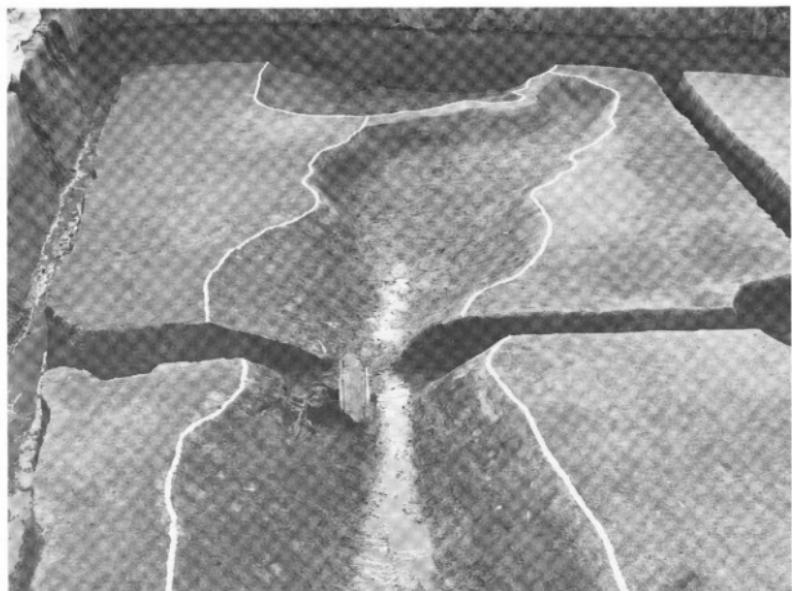


SR-01 検出状況(東より)

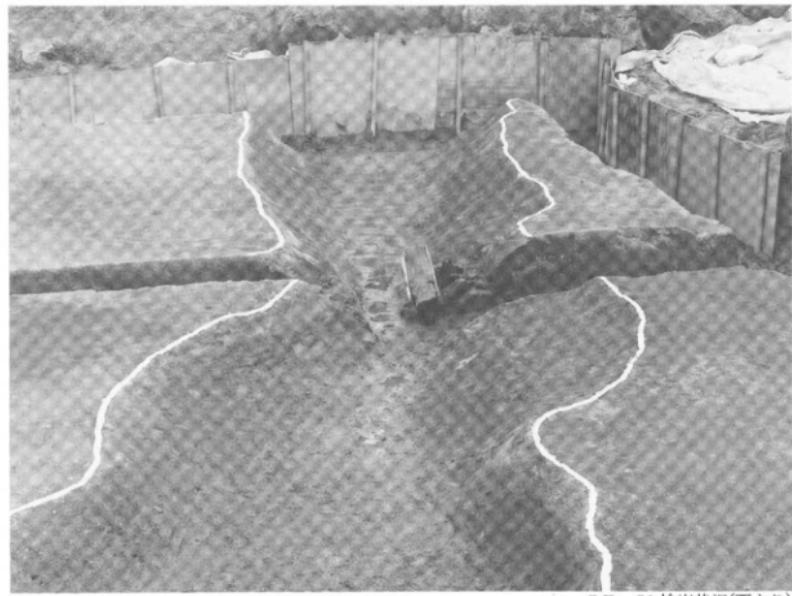


SR-01 検出状況(西より)

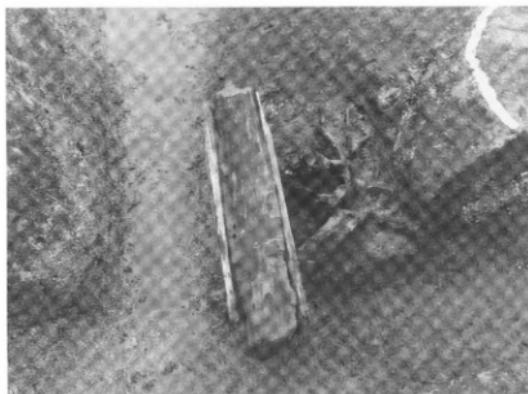
図版五  
遺構（A区  
第3遺構面）



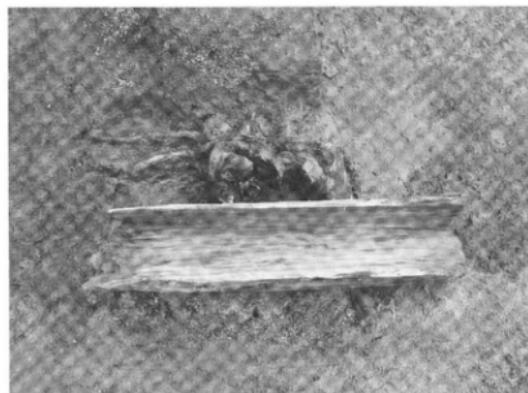
SD-01・SK-03 検出状況(東より)



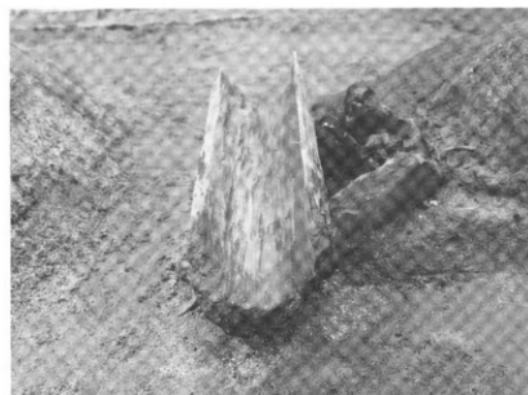
SD-01 検出状況(西より)



SD-01  
木桶状木製品検出状況  
(西より)



SD-01  
木桶状木製品検出状況  
(北より)

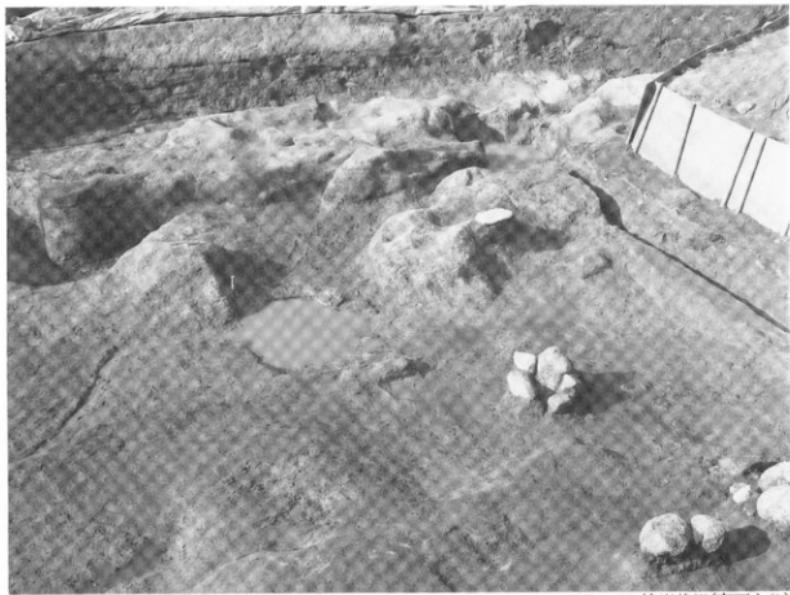


SD-01  
木桶状木製品検出状況  
(西より)

図版七 遺構(A区 第4遺構面)

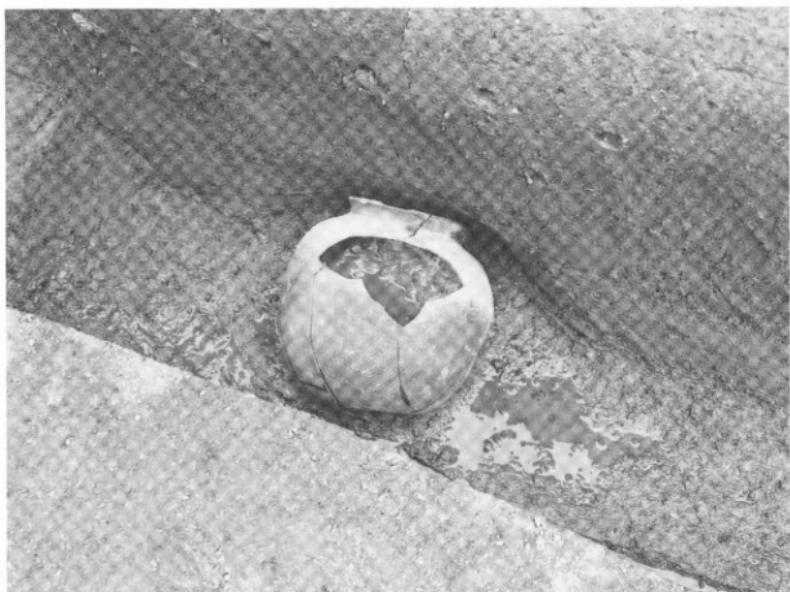


SR-02 検出状況(南東より)

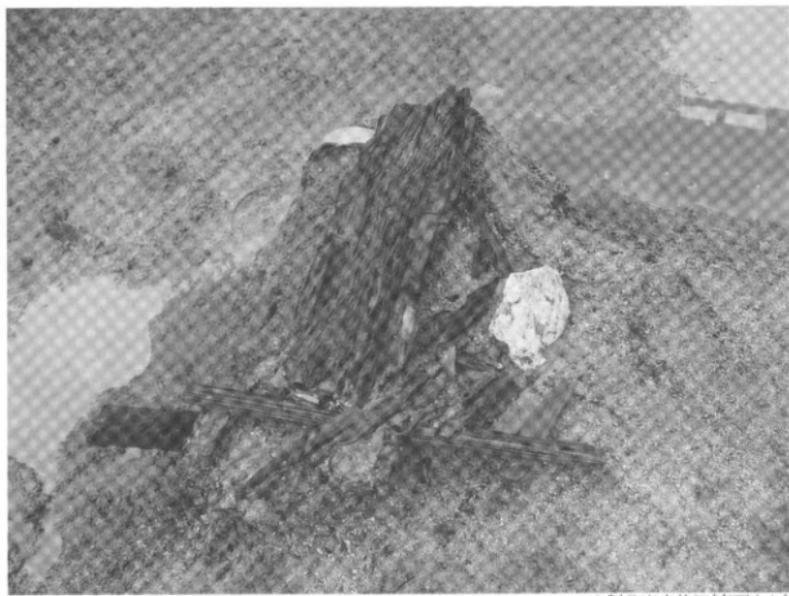


SR-02 検出状況(南西より)

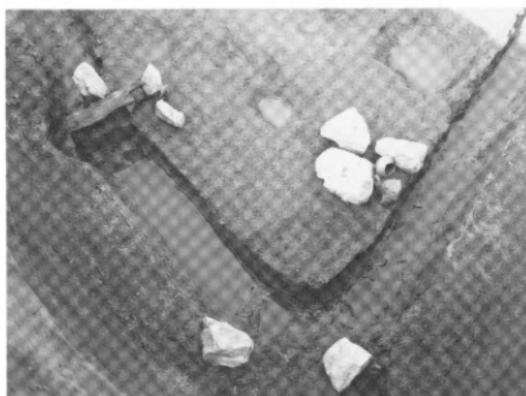
図版八  
遺構(A区)  
第4遺構面)



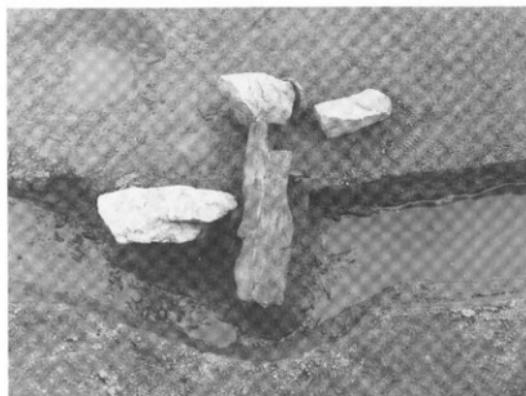
SR-02 須恵器甕出土状況(北西より)



SR-02 木製品出土状況(南西より)



SR-02  
遺物出土状況  
(南西より)

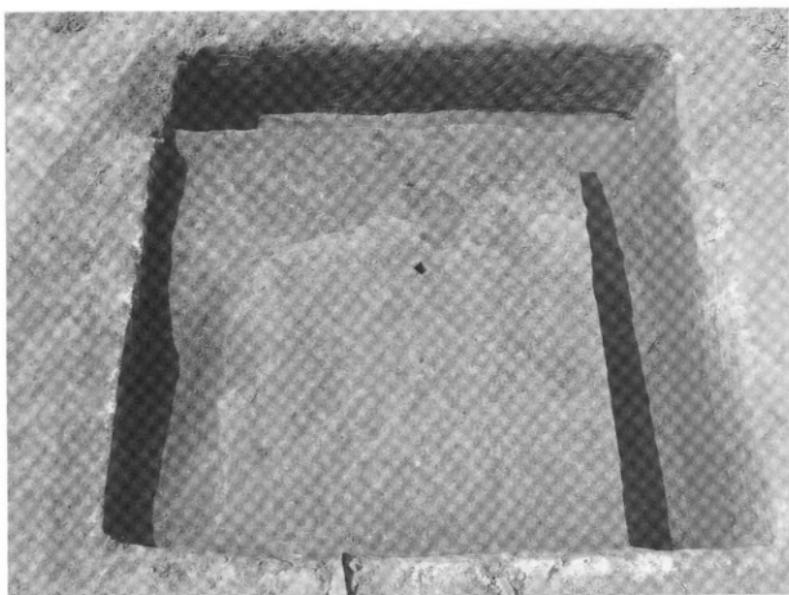


SR-02  
木製品出土状況  
(西より)

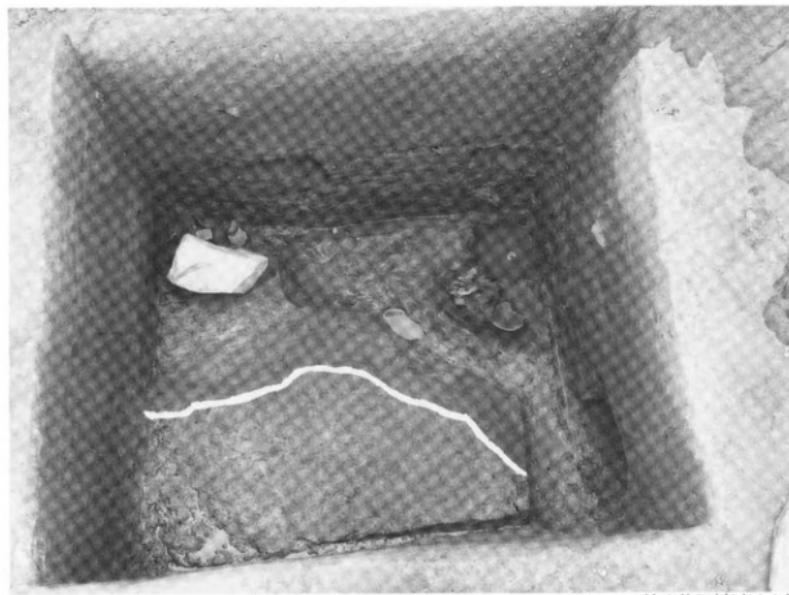


SR-02  
木製品出土状況  
(西より)

図版十  
遺構(B区)  
第5遺構面)



SD-02 挖削前(南西より)



SD-02 検出状況(南東より)

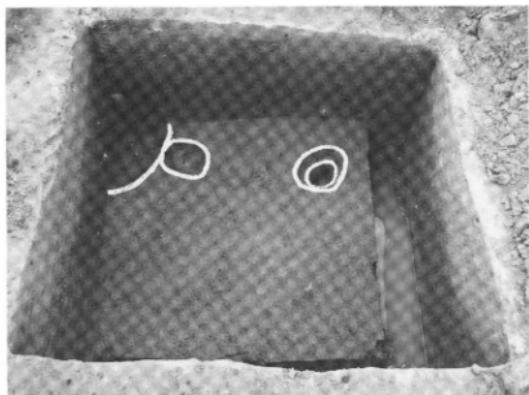


SD-02 遺物出土状況(南西より)



SD-02 遺物出土状況(北東より)

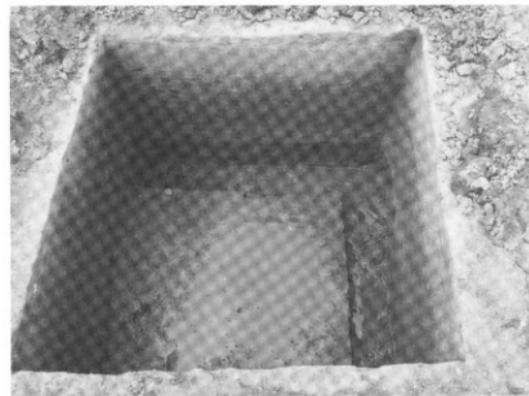
図版十一  
遺構  
(C区  
第3遺構面)



S P - 01 • 02  
S K - 01  
(北東より)



S P - 02  
馬下顎骨出土状況  
(北西より)

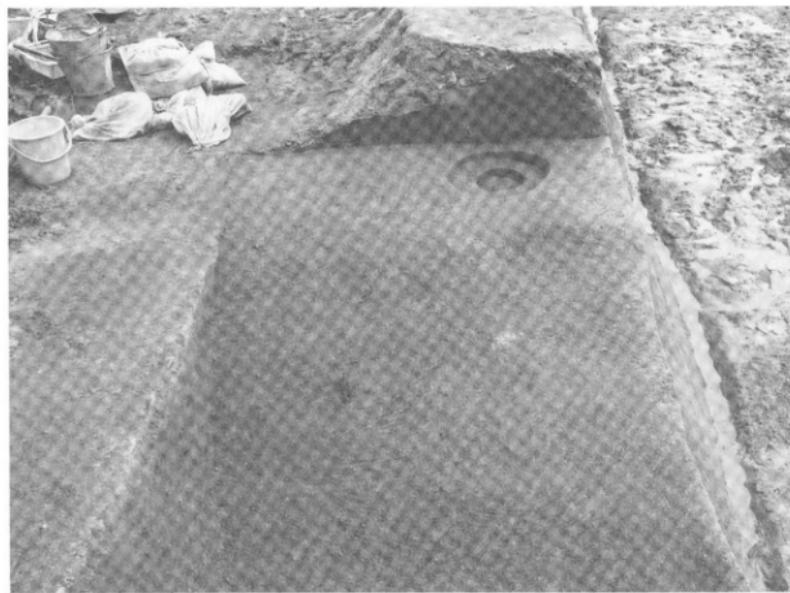


完掘状況  
(南東より)

図版十三 遺構（E区 第5遺構面）



SD-02 検出状況(南東より)

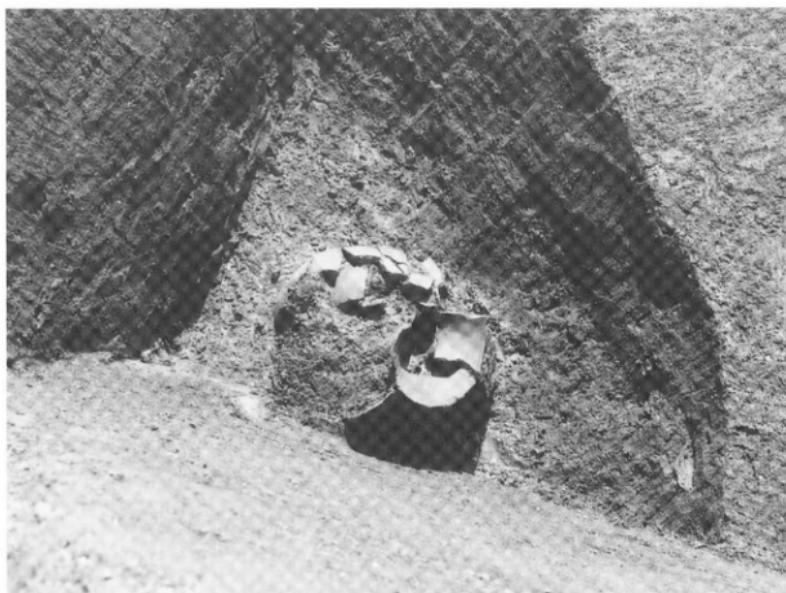


SP-03 検出状況(北西より)

図版十四 遺構(E区 第5遺構面)

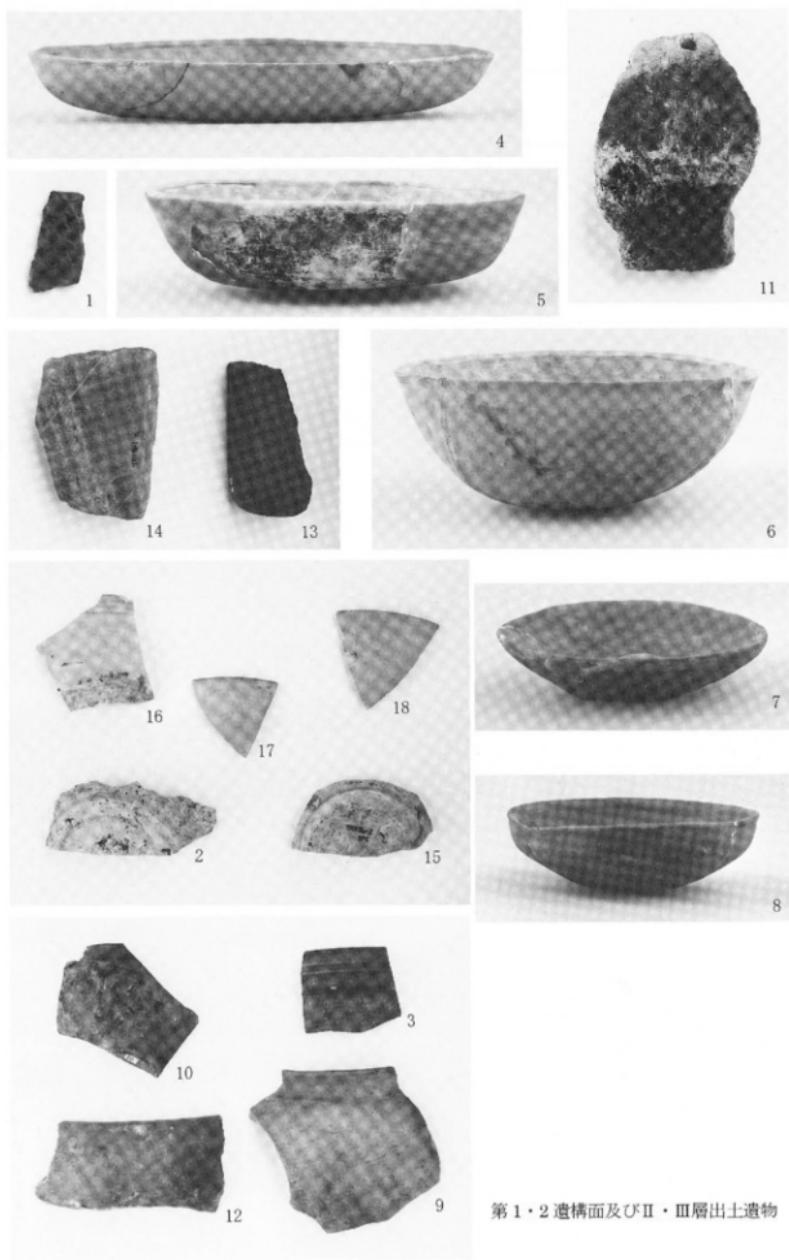


SD-02 遺物出土状況(東より)

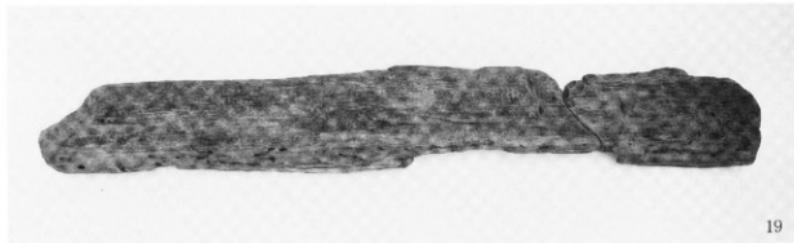


SD-02 遺物出土状況(北西より)

図版十五 遺物（A区）



第1・2遺構面及びII・III層出土遺物



19



20



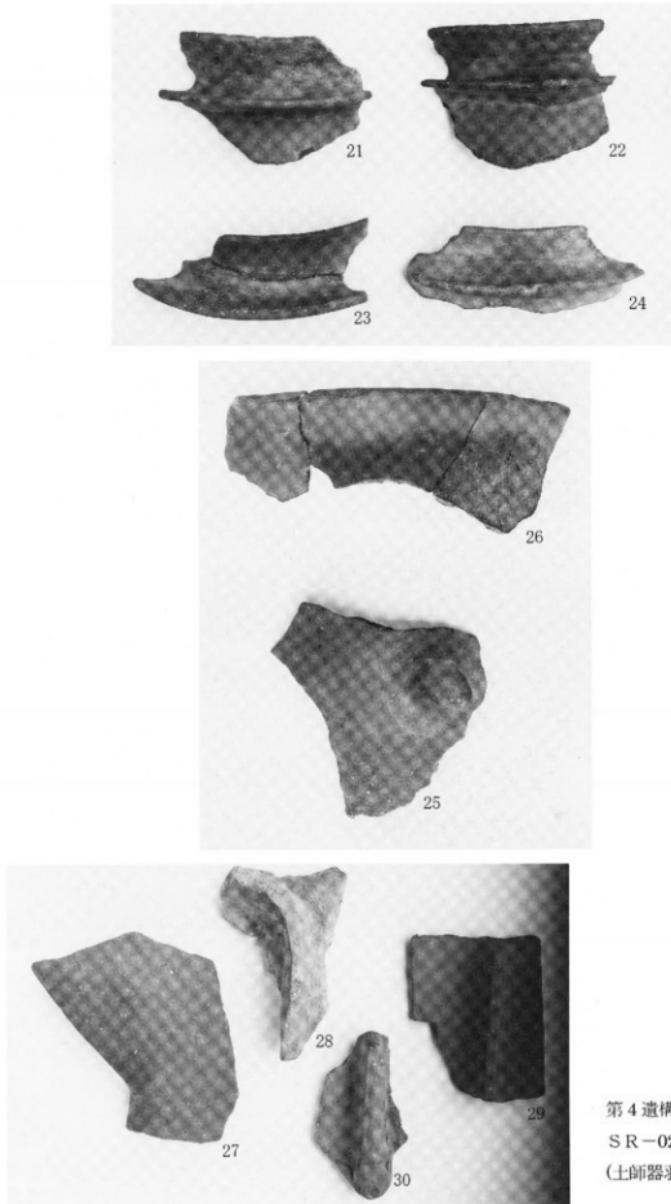
19(小口・拡大)



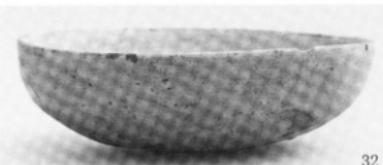
20(小口・拡大)

第3遺構面 SD-01 出土木柾状木製品

圖版十七 遺物 (A區)



第4遺構面  
S R - 02 出土遺物  
(土師器羽釜・甕)



32



39



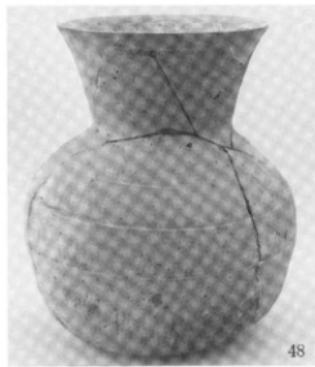
33



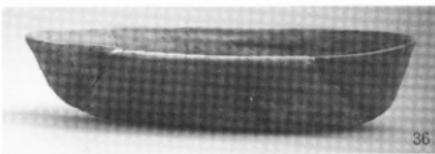
49



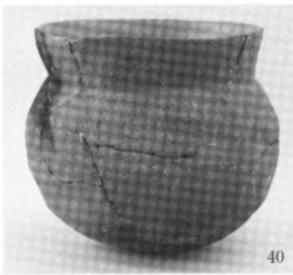
35



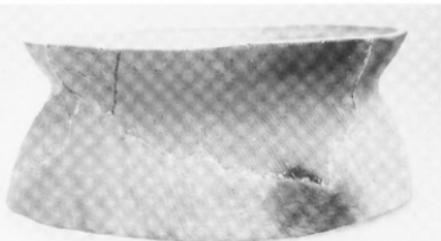
48



36

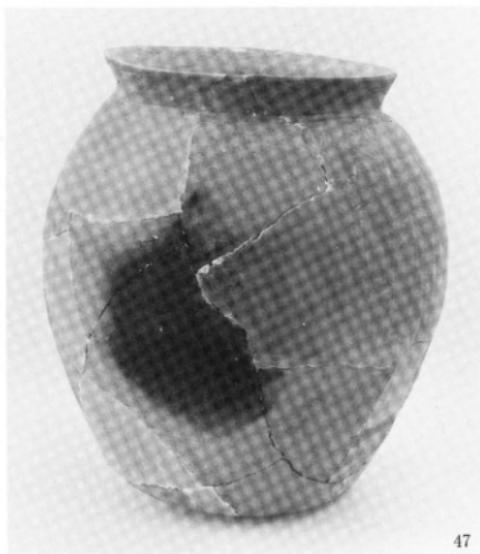


40

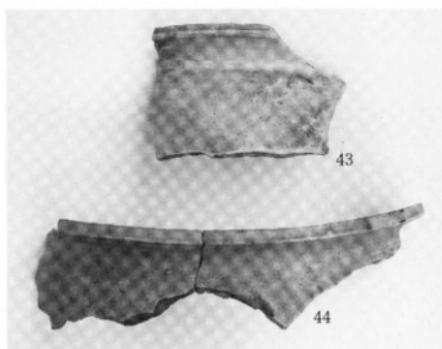


42

第4遺構面S R-02出土遺物(土師器杯・甕)

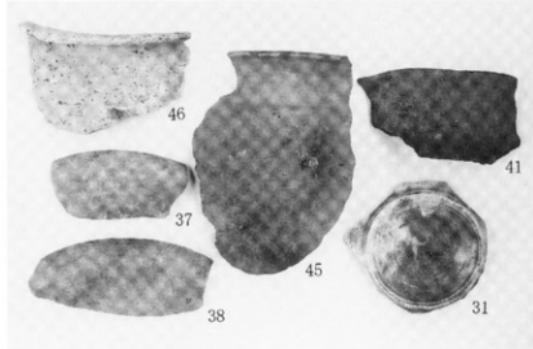


47



43

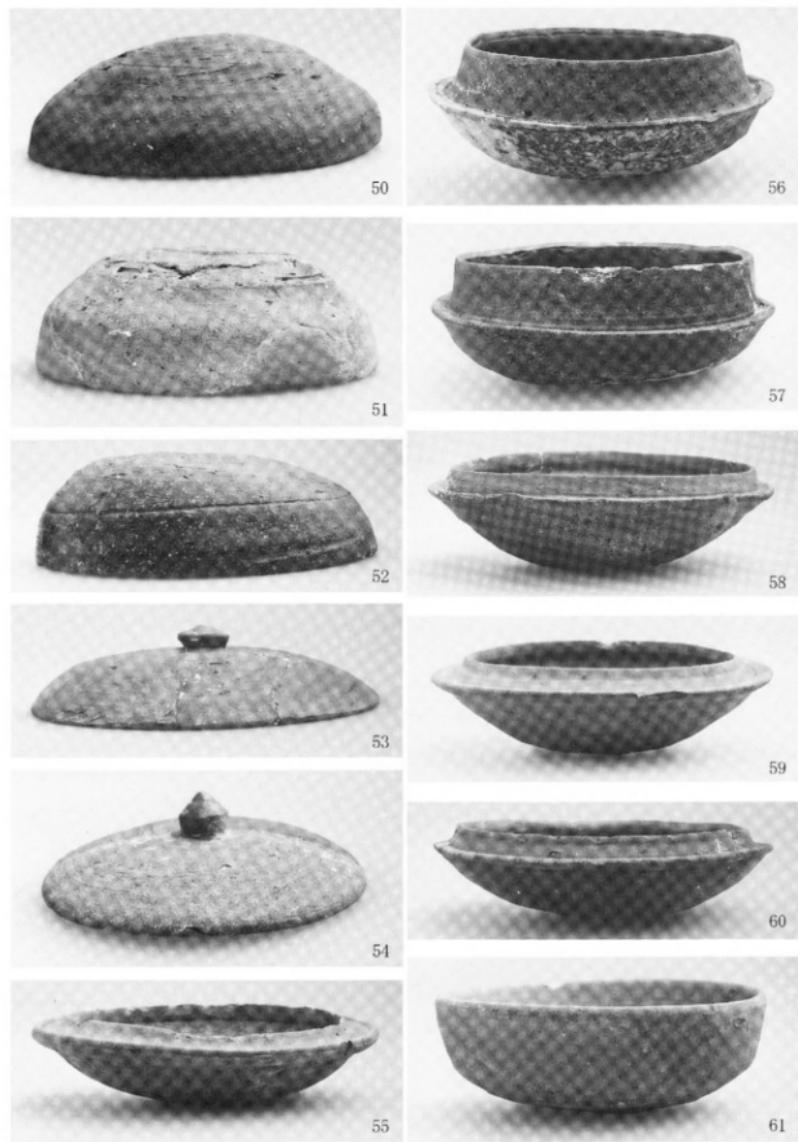
44



第4遺構面

S R - 02 出土遺物

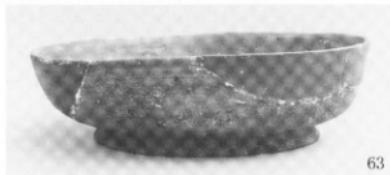
(綠釉・土師器杯・壺・弥生  
土器壺)



第4遺構面S R-02出土遺物(須惠器・杯)



62



63



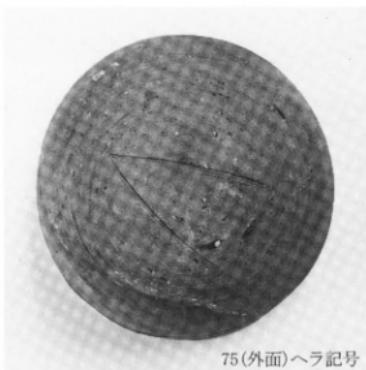
64



65



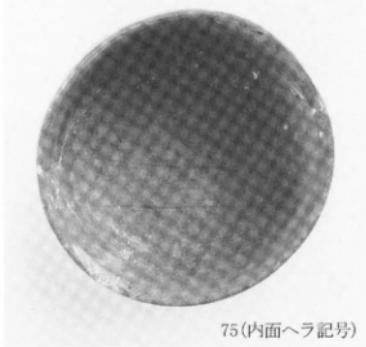
66



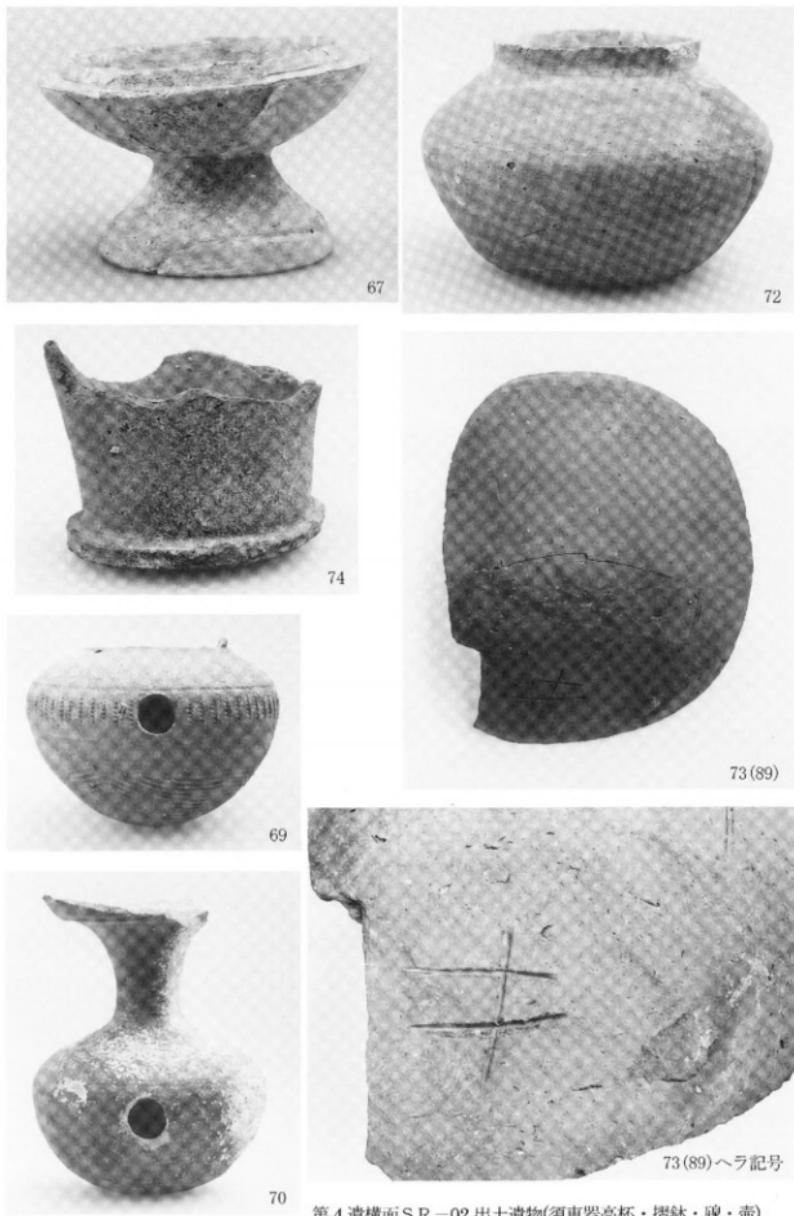
75(外面)ヘラ記号



75

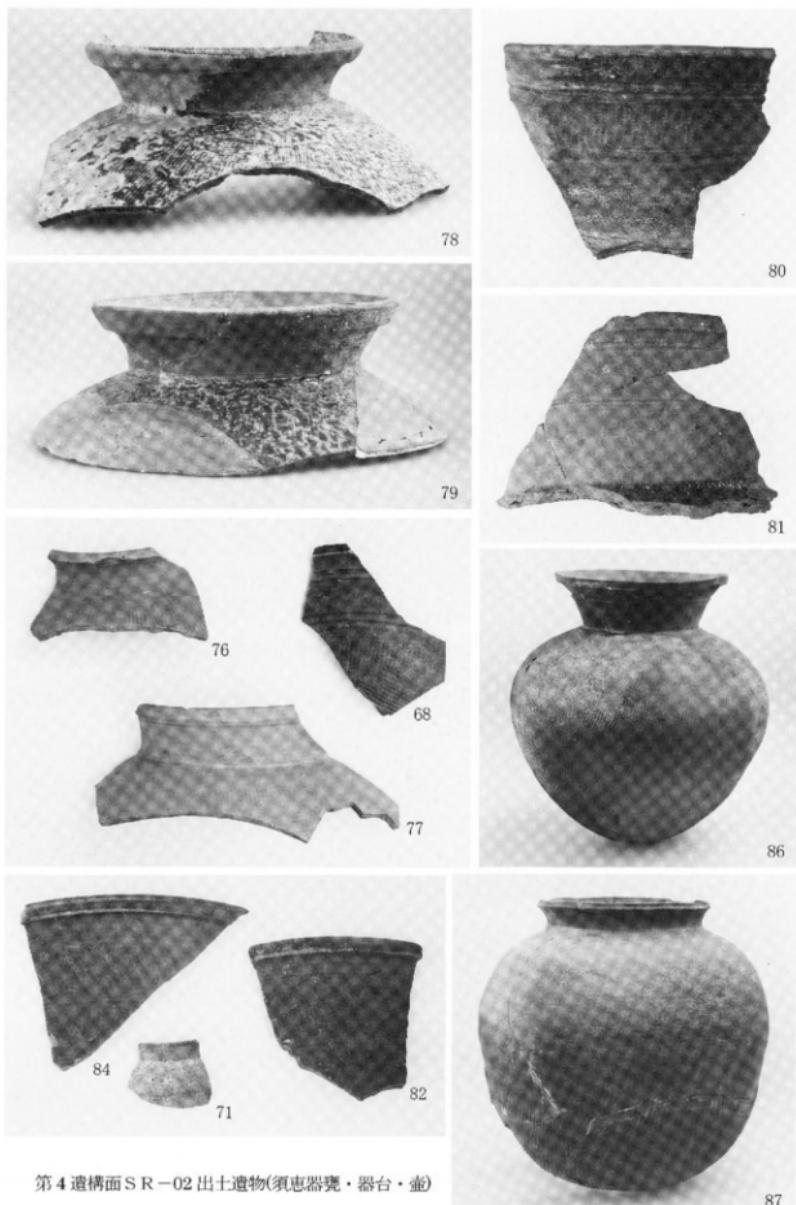


75(内面ヘラ記号)



第4 遺構面SR-02 出土遺物(須恵器高杯・擂鉢・壺・壺)

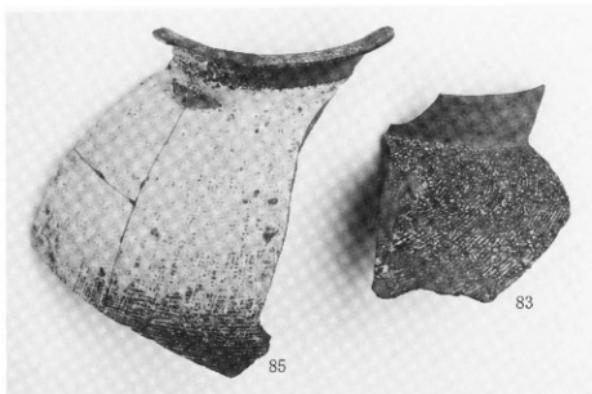
圖版二十三 遺物（A区）



第4 遺構面S R-02 出土遺物(須恵器甕・器台・壺)

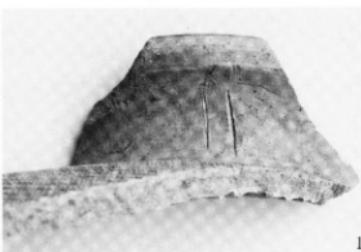
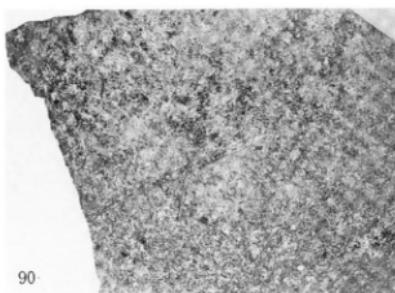
87

圖版二十四  
遺物（A區）

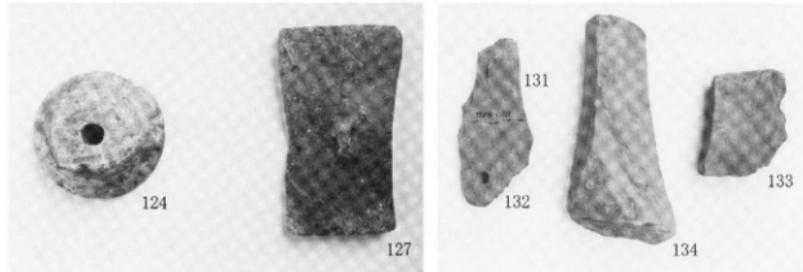
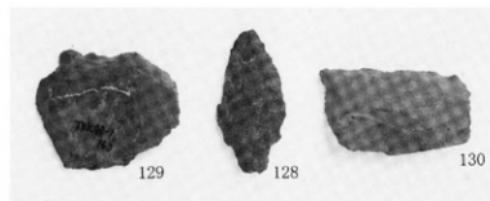
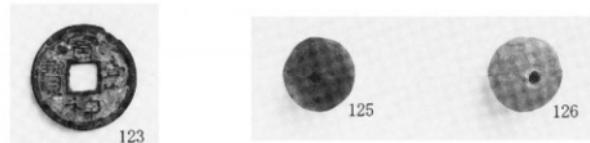
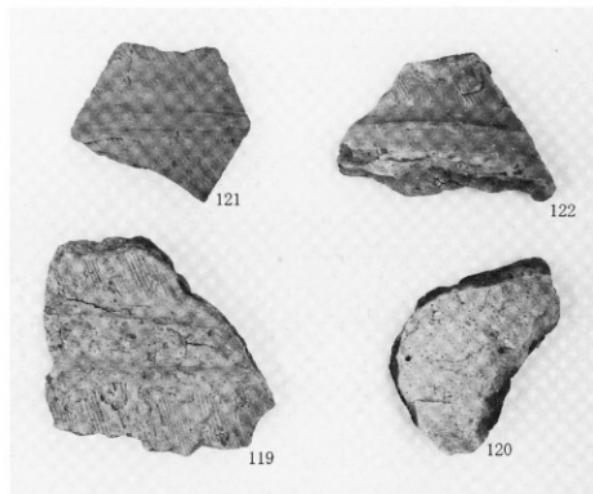


第4遺構面S-R-02出土遺物(須恵器壺)

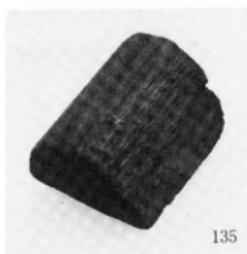
図版二十五  
遺物（A区）



第4 遺構面S R-02 出土遺物  
(ヘラ記号をもつ須恵器)



第4 遺構面SR-02出土遺物(円筒埴輪・「富寿神寶」・石製品・土製品)



135



142



138



136

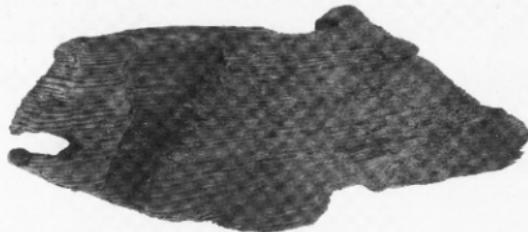


137



141

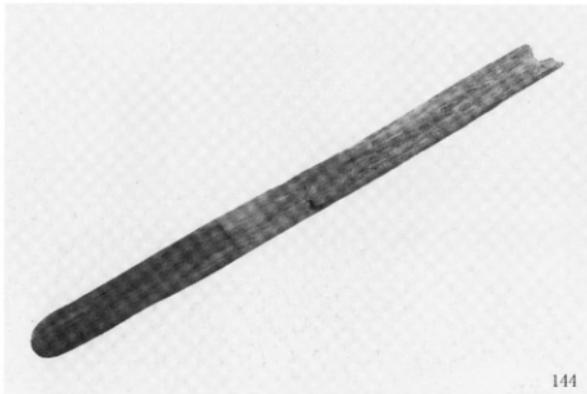
第4 遺構面S R-02 出土木製品(杭・曲物底板等)



139



143



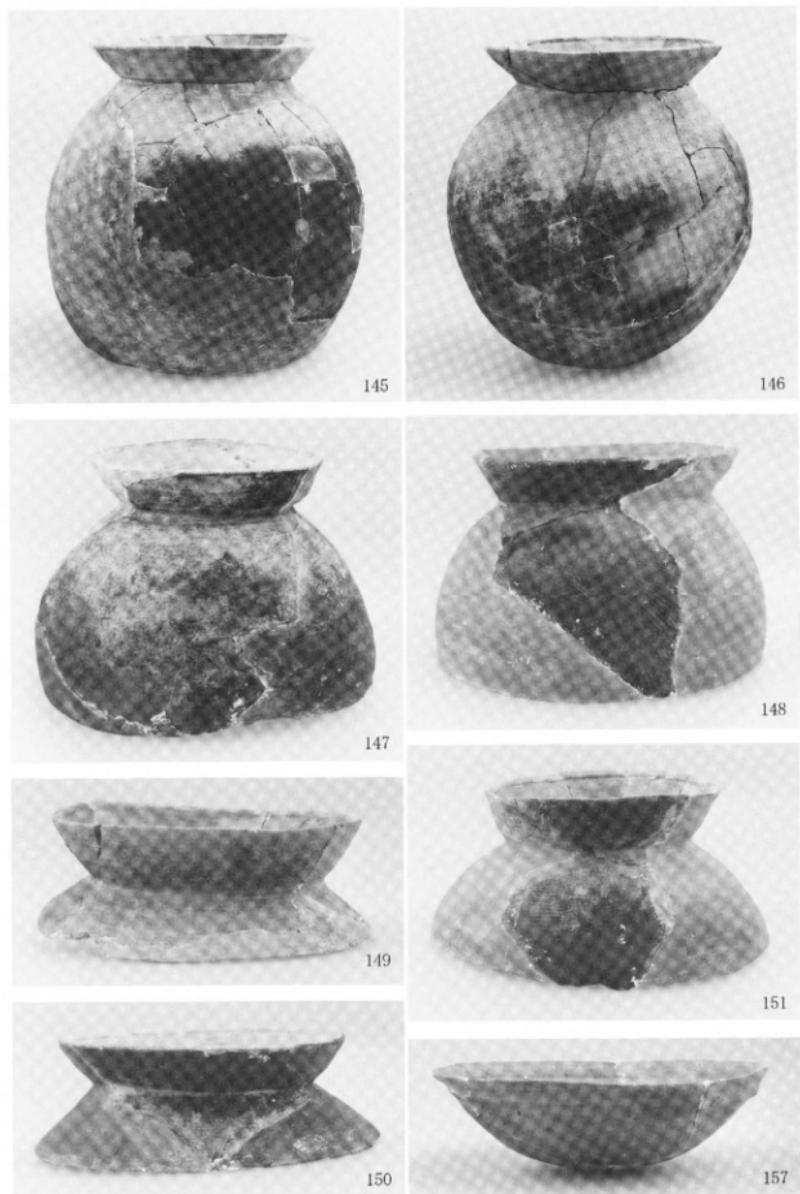
144

第4遺構面SR-02出土木製品(板材・角材等)

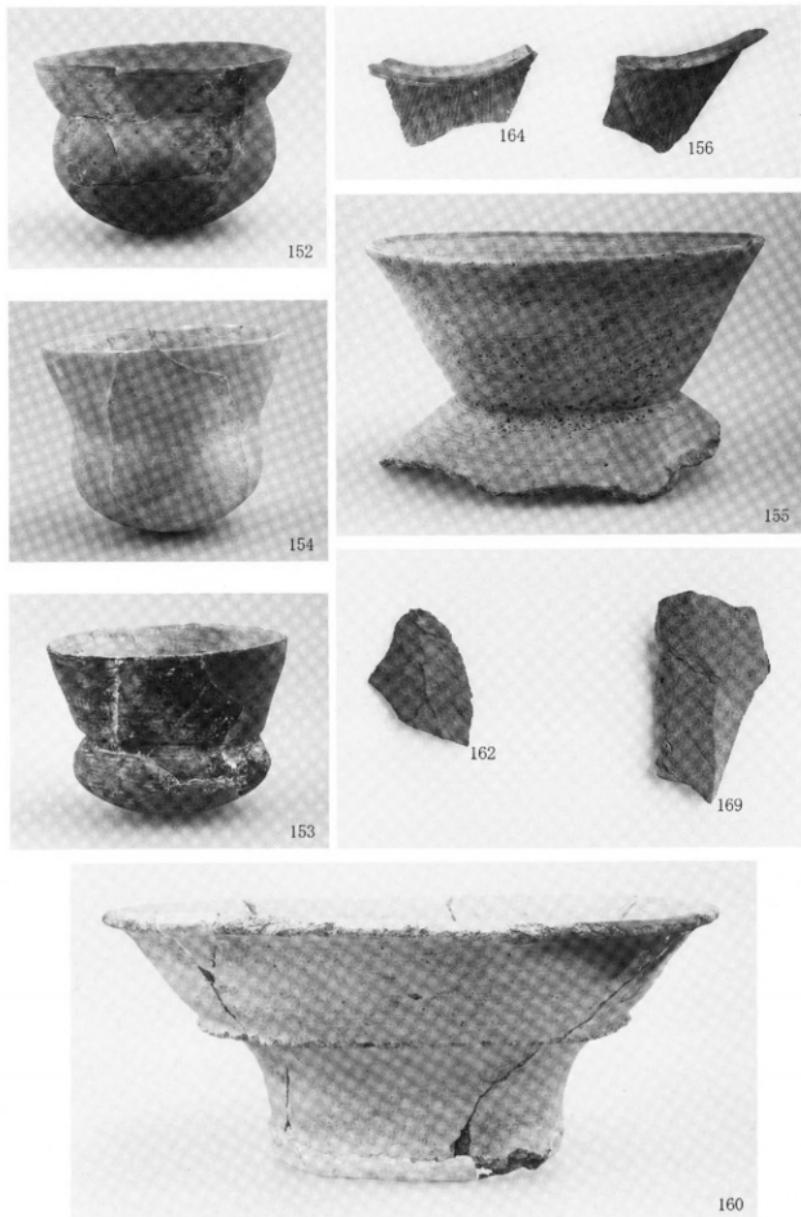


140

図版二十九 遺物（B区）



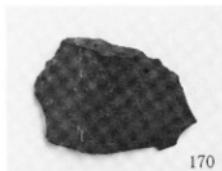
第5遺構面SD-02出土遺物(土師器壺・鉢)



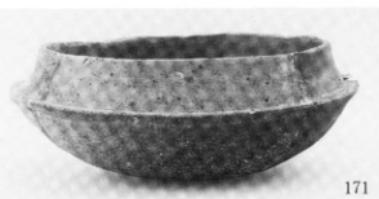
第5遺構面SD-02及びV層出土遺物(土師器直口壺・複合口縁壺・甕・小型丸底壺・剥片)



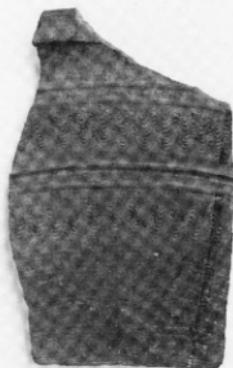
第5遺構面SD-02 及びV層出土遺物(土師器直口壺・複合口縁壺・高杯・小型丸底壺・白玉・須恵器杯蓋)



170



171



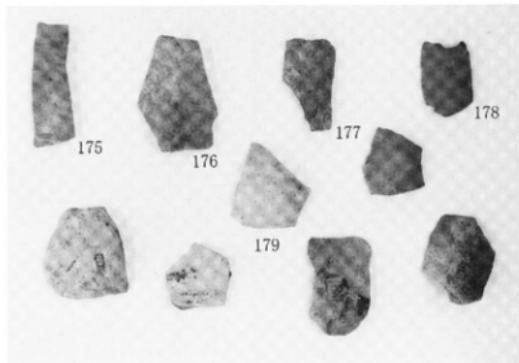
172



174

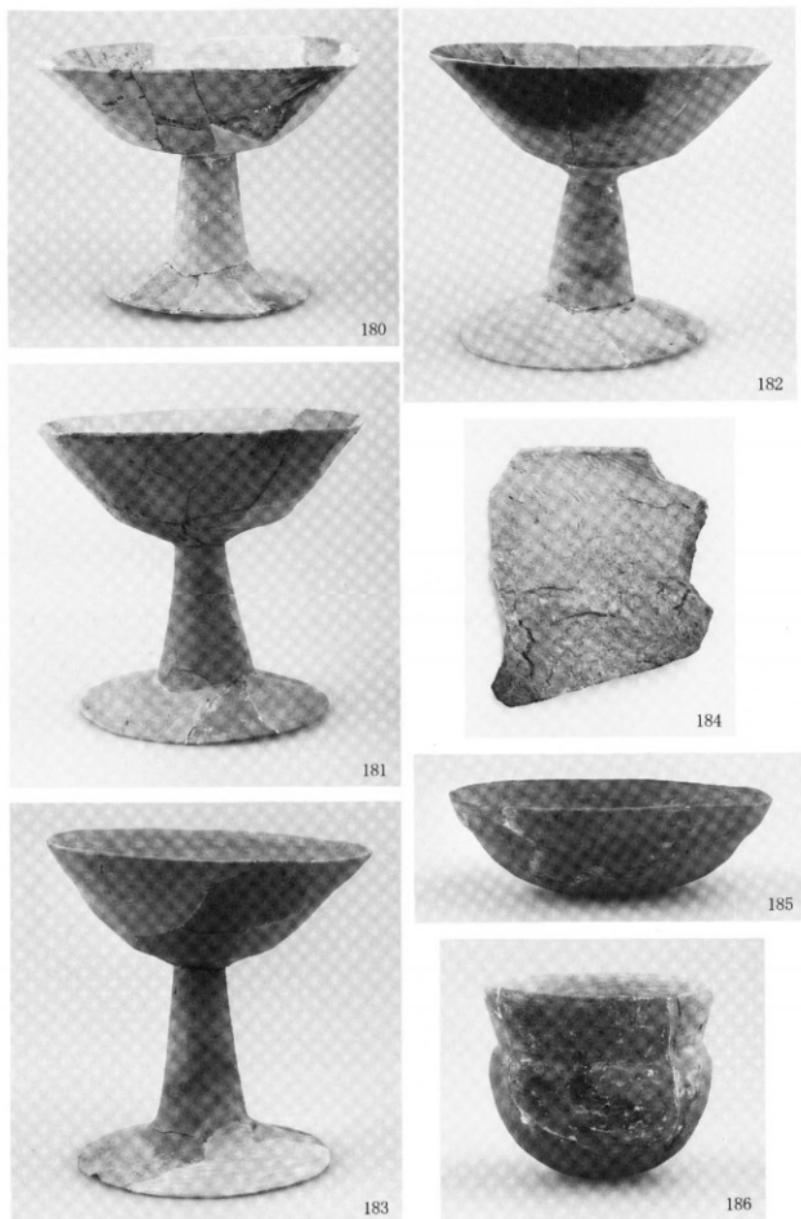


173



第3 遺構面

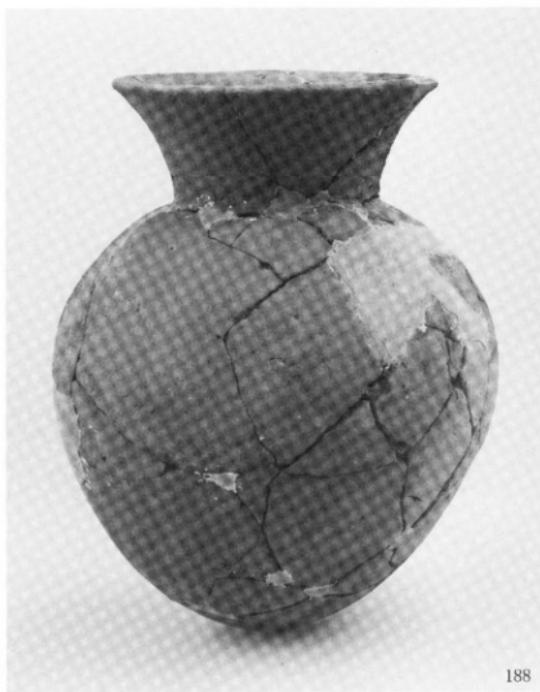
SP-01 及び III・IV層出土遺物  
(剝片・土師器甕・須恵器杯身・  
須恵器器台・製塙土器)



第5遺構面SD-02 及びIV層出土遺物(土師器高杯・鉢・小型丸底壺)



187



188

第5遺構面SD-02出土遺物(土師器複合口緣壺・直口壺)

---

大東市埋蔵文化財調査報告第18集

## 寺川遺跡発掘調査報告書

2003年1月10日発行

編集・発行 大東市教育委員会

〒574-8555 大東市谷川1丁目1番1号

TEL.072-872-2181

印刷・製本 西村印刷株式会社

〒534-0021 大阪市都島区都島本通5丁目15-3

TEL.06-6925-6555

---

